



特集

文学部国際教育学科・教養学部 初の卒業生輩出

新型コロナウイルス禍における大学の対応（連載）

祝 吹奏楽部 第69回 全日本吹奏楽コンクール初出場＆銀賞受賞

合唱団 第74回 全日本合唱コンクール全国大会金賞＆文部科学大臣賞受賞



さよなら「文大」退職教員からのことば
おくることば／旅立つことば
卒業論文・研究論文・修士論文 一覧
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂



特集 教養学部 初の卒業生輩出



学校教育学科の開設を振り返って

学校教育学科長 鳥原 正敏

教養学部学校教育学科は、その前身である文学部初等教育学科を基礎として平成30年4月に開設されました。そして本年度、初めての卒業生を送り出します。

学校教育学科の理念・目的は「初等教育を基盤として、小学校～中学校の連携を見通すことができる、すぐれた教師の養成」です。この実現を目指し、新たに中学校数学及び理科の免許課程を設置、この4月から中学校に数学や理科の教員として着任する卒業生もいます。「教育フィールド研究」の活動では、学科に所属する全学生が市内の小学校や学童保育に出かけ、子どもたちと直接かわりながら理論と実践の往還を実現

しつつ、学びを深めてきました。また、特別支援学校教諭の養成と共に、通常学級においても特別なニーズに対応できる教師の養成に努めてきました。その他、サイモン・フレーザー大学（カナダ）に続き、フレネ教育の研究においてロレーヌ大学（フランス）との関係を構築するなど、学校教育のグローバル化にも対応しようとしています。

この4年を振り返ってみると、コロナ禍など様々な困難もありました。しかし今は、多くの方々に支えられながら、無事卒業生を送り出すことを、大変うれしく思います。今年の卒業生はコロナ禍と大学生活が重なるなかで、教職員と一緒に本格

的なオンライン授業を模索するなど、自ら新しい学びを創造してきました。このように、厳しい状況においても冷静かつ主体的に課題と向き合う力を身に着けた卒業生は、それぞれの学校や職場といった実社会において活躍し、これからも学び続けてくれると思います。

末筆ながら、本学科を応援して頂いている関係者の皆様と地域の方々に深く御礼申し上げます。今後とも本学科と卒業生への応援を、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



新井 仁先生による数学教育に関する授業風景



初の卒業生を輩出して

地域社会学科長 春日 尚雄

2022年3月に都留文科大学教養学部を卒業するみなさん、おめでとうございます。本学が2018年度から教養学部と文学部の2学部体制になる制度改革をおこなって以来、初めて送り出す卒業生ということになります。教養学部は学校教育学科と地域社会学科の2学科で構成されていますが、地域社会学科にとってはそれまでの社会学科から改編され、2018年4月の入学生が新学科の第1期生として、社会に羽ばたいていくということでもあります。第1期生が入学した際には、全国から170名あまりの新入生のみなさんを迎えて新しい学科がスタートしまし

たが、それから4年が経過し立派な卒業生として送り出すことができるのは実に感無量です。

地域社会学科の主要なコンセプトとして、「地域で活躍できるグローバルな視点を持った人材を育成する」ことが示されています。ディプロマポリシーにも、地域と世界を対象とした共通の基盤として4つの能力を求めており、地域理解力、構想力、行動力、協働力をあげています。このディプロマポリシーに従うカリキュラムポリシーおよびアドミッションポリシーの新しい3ポリシーを基にこれまで新学科は運営されてきました。

地域社会学科の教員と学生が、現実の経験的な学びを異なる地域や国境を越えて交流して生かせることができるようになるには、まだまだ道半ばと言えます。特にこの2年間はコロナ禍という1世紀に1度あるかという状況に、学びと生活は大きく制限されてしまい、大学生としてやりたいことが十分できなかったのではないのでしょうか。多くの人が社会人になっていくと思いますが、長い人生の中で都留におけるこの経験も生かして頂ければと思います。



協働体験を通じて創造と学びを生み出すワークショップ演習の様子



副学長を退任するにあたって

学生・教育担当理事（副学長） 杉本 光司

2016年3月31日の定年退職、そして、その後4年間の情報センター特任教授の後、2020年4月1日から着任した学生・教育担当理事（副学長）として過ごした2年間で、この職から退任させて頂くことにしました。

この2年間に流れた時間は、私たちがこれまで経験したことのない、そして、まったく予想もつかない状況との戦いの連続でした。

教授会をはじめ、多くの会議もWeb会議システムを利用したハイブリッド会議となりましたので、リモート参加の方々の状況も把握できず、特に、教授会メンバーとして離れておりました4年間に採用された先生方一人ひとりの名前と顔を知ることは、マスク着用の日常において非常に難しく、いつも何かしらの不足感を持ちながら教授会の司会に臨んでいました。

もちろん、毎週のように開催される新型コロナウイルス感染症等対策本部会議において決定される『活動指針』レベルによる授業を始めとする学内活動も、連日発表される学内や地域、そして国全体における感染指標となる数値によって対応することとなり、同時に、メディアでも連日、朝から晩まで数値のみがクローズアップされ、否が応でも、それらへの対応に義務感を覚えるようになってしまったことも悲しい現実でした。

一方、遠隔授業や遠隔会議という、これまで身近でなかったICTを活用した運用システムが、この短時間の中で取り入れられ運用された事実は、新しい時代の到来を予想さえできるようになり、私たちの日常生活にも大きな変化をもたらしたと感じます。「GIGAスクール」、「DX」、「データサイエンス」、「AI」、「AR・VR」、「電子決済」、「電子チケット」等といったICTに関する言葉も多くの

社会分野の中において発信され、それらの状況を後押しする様々な数値情報とともに、ますますこれらに追われる日々が今後も続くような気がします。

そして都留文科大学においても、来年、令和5年（2023）4月に供用開始となる新しい講義棟においても、3階には『ICTを活用したものづくり』と日常的に触れ合うことの出来るスペースも用意されることとなり、本学のような文系分野の学生であっても必須のスキルを身に付ける場の一つとして大いに活用されることを望んでいます。

最後に、学生・教育担当副学長としての任務を遂行するにあたり、関係する先生方や事務局職員の方々の多大な支えの下、今日までの日々、どうか過ごすことが出来たことに対して心より感謝申し上げます。

コロナとの戦いも、まだまだ厳しい状況が続くかと思いますが、関係する皆様のご活躍により、戦いの先に見える都留文科大学がますます輝き続けることを願っております。



スマホに配信される電子チケット



The Long Goodbye

英文学科教授 Evans, Hywel

It's becoming increasingly difficult for me to ignore the fact that my stint as a full-time teacher at this university is finally coming to an end. I've had a great time over the years. However, I'll be continuing to work here as a part-timer next year and beyond, so in one way it doesn't really feel like so much of a milestone.

My involvement at Tsuru University as a part-timer goes back about twenty seven years, so it kind of feels like a continuation of a long, historical process. Even so, if I think of it in those terms, I'd have to say that the experience of working here has been extremely significant for me. Many of my most important personal experiences have taken place during that time.

From a professional perspective, it's also been an incredible time. I never expected to be the first foreign head of department at Tsuru, but that actually happened, and what a learning process it was! In fact, a huge amount of what I have learned over the years has been accomplished within the walls of this university. For that, I am sincerely grateful.

I had the opportunity to do quite a lot of travelling related to research activities and student exchange programs. During the last few years, I have travelled to Europe, north America, and Southeast Asia. It was a lot of fun to try to set up connections with universities in different parts of the world, and I was even able to organize and lead international conferences. On many different levels, it has been an absolutely unforgettable experience, and I feel extremely grateful to have had the opportunity to meet many people from different countries and educational institutions.

In addition, I had the opportunity to work on online course development, which was also hugely exciting. The whole experience made me realize how important it is to maintain communication, and that is particularly true given

the challenges that the pandemic has thrown up. I have no intention of slowing down with regard to these kinds of activities, and I see this as just the beginning.

The standard of the students at Tsuru is extremely high by comparison with many other institutions, and the foreign teachers here are always quick to point out that English standards are very good.

It cannot be denied that being able to work and research here has made my life easier and better in many ways. The administrative and teaching staff also have helped me in so many ways over the years. There is not space here to make an adequate account. In any case, you know who you are, so thank you very much.

My hope is that the university will go from strength to strength and that our students will continue to make a massive contribution to society well into the future. A big part of my heart will remain here, and you'll still be able to see me walking the corridors on a physical basis at least once a week.



The Big Snow



文大での4年間に感謝

地域社会学科教授 鈴木 哲雄

本学に赴任したのは、2018年4月。4年間という短い在任であったが、3月には晴れて定年退職をむかえる。着任した4年前の学報での挨拶には、「3月までは、北海道教育大学に勤めておりました。千葉県出身で、14年前（*今となれば、18年前）までは千葉県などで高校の教員をしながら、中世東国の地域史研究や地域史学習の教材作りなどに取り組んできました。北海道でも多くのことを学びましたが、今後は、山梨県にも範囲を広げながら、学生の皆さんとともに、地域史研究の観点から「地域に学び、地域から考える」ことをすすめて行こうと思います。」と書いたが、一昨年からのコロナ禍もあり、充分なことではできなかったと思う。

辛うじて、山梨県立博物館・甲斐浅間神社・甲斐国分寺跡・武田氏居館跡（武田神社）・甲斐善光寺などへの巡検は、本年度のゼミ卒業生、ゼミ3年生と2か年度にわたって行うことができた。また、田原の滝上（谷村大堰あるいは十日市場大堰）から分水される江戸時代からの用水路「家中川」や滝下の田原神社その向かいの滝下不動なども何度か学生と巡検した場所である。滝下不動にある五輪塔は中世のものかもしれないと思う。

さて、文字通り全国各地から文大に集う学生の皆さんは、ほんとうに優秀であった。文大を核とした文化薫るこの大学村は、研究にサークル活動に、そしてアルバイトにと互いに切磋琢磨しながら学生たちが創り育ててきた地域コミュニケーションというにふさわしい。ここで培われた「菁菁たる我」は日本の各地で、いや世界の各地で逞しく成長し、新たな地域社会づくりに参画していくであろう。大いに期待するところである。

幸いにも晩年にこうした学生たちに出会う

ことで、そのエネルギーのほんの少しを糧にさせてもらいながら、研究生活の一つの締めくくりができたように思う。文大の4年間には、念願の『酒天童子絵巻の謎ー「大江山絵詞」と坂東武士』（岩波書店、2019年）を、そして『日本中世の村と百姓』（吉川弘文館、2021年）を上梓することができた。コロナ禍のために1年延期された、第53回日本古文書学会大会の講演「香取文書の伝来と保存」を昨年の9月に、地方史研究協議会第71回（茨城）大会の公開講演「鬼怒川＝香取内海の地域世界一海夫注文から霞ヶ浦四十八津・北浦四十四津へ」を10月に（ともにオンライン開催）させて頂けたのも、私にとっては有難いことであった。

改めて文大の学生の皆さん、そして教職員の皆さんに御礼申し上げるとともに、文大のさらなる発展を心からお祈り申し上げる。新設の地域社会学科の一期生とともに、予定通り卒業となる。こちらは枯れかけた我ではあるが、もう少し頑張ってみよう。



昨年5月、ゼミ3年生と甲斐善光寺門前にて

おくることば



あれこれを 共有した者として

国文学科教授 古川 裕佳

皆さんの大学生生活の後半は、なかったこと／できなかったことが多い2年間でした。ゼミ合宿がなかった、対面でのゼミコンができなかった、楽しみにしていた課外活動がなかった、そんな学生生活だったかもしれません。でもおそらく国文学科の学生たちにとって、いつも〈本〉はあった、ことばや物語はそばにあったはずです。だから何はなくとも学問はできたし、卒論を書き上げることができたのでしょう。頑張った皆さん、おめでとうございます。

コロナ禍はわれわれにとって前代未聞の経験でしたが、歴史を振り返れば感染症による社会の動揺は初めてのことでありません。100年前のスペインインフルエンザ禍を描いた志賀直哉「流行感冒」は、あまり知られていない作品でしたが、主人公夫婦の

ほかに子供や女中などもいる大家族のピリピリした雰囲気や、ぶつかりつつ支え合おうとする家庭の姿に注目されるようになりました。歴史や出来事の記憶装置である文学作品の、持続力のあることばを受け止めてゆくことの大事さを感じました。

皆さんもこのコロナ禍の生き証人です。オンライン授業への切り替えのドタバタ、マスク入手をめぐるあれこれ、予防接種の予約の奪い合いなど、どれも語り継ぎたいような思い出でもないかもしれません。しかし、いつか、どこかで、皆さんとすれ違いうことがあったら、ともにその時代を生き延びた者同士として、語り合いたい気がします。この時代を共にしのいだ仲間たち、どうぞお元気で。



Do Not Settle for Mediocrity

英文学科教授
Olagboyega, Kolawole Waziri

It is with a great pleasure that I congratulate you on your graduation. You have worked very hard for four years or more to earn your degrees. You deserve all the praises and admiration.

Most of you will go into the world of work. For most of you, the next forty to fifty years will represent a cycle of work, work and then family, and work, work, and work. This is good if you love what you do. You must love your work; and if you do, you will enjoy doing what you do so it would not seem like work anymore but like a hobby. For those of you who do not enjoy your work, my advice to you is to have the courage to quit and pursue what makes you happy. After all, it is not life itself that matters but the courage one brings to it.

Why is courage important and why must you have it? If you want to be happy in your life after your university education, you must have the courage to

do what you really want to do. Otherwise, you will be working for that company day-in, day-out, and before you realize it, it is time to retire. You then begin to wonder where all the time has gone. More importantly, what happened to the dreams you had when you were at the university? What happened to the dreams you had to travel the world; to volunteer in a developing country; to study more; and to do many other things?

What your Japanese education and socialization processes have not prepared you for is to question the status quo; to think for yourself and behave differently in order to do whatever you want to do. To achieve your dreams, you must have the courage to stand up for yourself, by enduring the hardship that will lead to your everlasting happiness; by being that proverbial “nail”, but one that refuses to be hammered down.

Meanwhile, you must remember that our successes are conditioned by the amount of risk we are ready to take. And, the big fish is never caught in shallow waters. If you don't have the job you love, be prepared to risk anything. Do not settle for mediocrity in life. Eventually, you will gain everything and you will be happy. I wish you happiness throughout the remaining years of your lives.



2つの移動

比較文化学科教授 邊 英浩

やはり「卒業おめでとうございます」は送りたい言葉です。時間は人間が意味を与えて始めて切断面ができ、新しい人生を始められるため、今皆さんは新しいステージに行くため「時間を移動」せねばなりません。さてみなさんは今時間を切断するわけですが、今後どうされますか？多くの場合、新卒で就職し定年まで同じ所で一「生」懸命でもあり、一「所」懸命でもある人生が待っています。転職が困難なため、職場が1つの蛸壺のようで、その中で権力者を怒らせないように気をつけながら慢性腰痛になり、肩が凝っては40肩だとかごまかしながら生きていく人も多いですね。学生時代生気澁刺としていた若者が社畜生活が長くなり別人のように変わることも多いですね。しかしそんな人生を初めから望

む人はいないでしょう。

もう一つの移動、「空間を移動する」ことがヒントとなるかもしれません。「A rolling stone gathers no moss」は一カ所にじっとしては苔が生えてしまうと移動することを勧めるものでしたが、日本では「転籍苔むさず」と訳して、住居を移すことを否定的にとらえました。職業の移動も「3年我慢しろ」と言って否定的です。韓国人は2年に一度引越しをし、国境も超えて移動する人が多く権力に対して抵抗をします。EUにおいて実現された国境を超える人間の移動はかつては空想に見えたことでしょう。しかし皆が空想し現実になったのです。広い世界に移動してってください。卒業おめでとうございます。



You Don't Control What Happens, You Control How You Respond

国際教育学科講師
Nordström, Karl Johan

Life is change, and how we react to that change in large part determine who we are, who we become, and the quality of our lives.

When you started as freshmen at Tsuru University, it was before the Covid-19 pandemic ravaged the world. Students still went to class, facemasks were not the norm, and campus life was flourishing. During your second year, you studied in Scandinavia during the autumn term, honing your academic skills and immersing yourself in intercultural exchange. As third year students, you experienced University life through the lens of a world pandemic; classes going online and campus life severely restricted. Finally, as fourth year students, classes were mostly once again held face to face, yet facemasks and various other sanitary precautions seem to have become the new normal.

If there is some good to seize upon in these

drastically changing, pandemic ridden times, perhaps it is the insight that *You Don't Control What Happens, You Control How You Respond*. This insight from Stoic philosophy, on the importance of differentiating between what we can change and what we can't, was eloquently expressed by Epictetus:

"The chief task in life is simply this: to identify and separate matters so that I can say clearly to myself which are externals not under my control, and which have to do with the choices I actually control. Where then do I look for good and evil? Not to uncontrollable externals, but within myself to the choices that are my own..."
— Epictetus, Discourses, 2.5.4-5

No matter what happens around you, or to you, in this beautiful yet often broken world, what you control is how you respond. Therefore, I raise my glass to you in a celebratory salute. Through all of the changes you have experienced during your four years at Tsuru University, you have persevered, worked hard under increasingly difficult circumstances to earn your degree, and it is now my pleasure to be able to congratulate you on your graduation. Congratulations!



感謝と祈り

学校教育学科教授 清水 雅彦

常々「旅が好き！」と公言する私ですが、それは人との出会いがあることはもちろん、自然と出会い、未知なるものと遭遇し、日頃味わうことのできない感動を得られることに由縁します。何よりも一度自分を清浄化できる喜びが、次の出会いをより新鮮なものにしてくれる、そんなところにも心惹かれるのです。

音楽には作曲家の、加えて歌には詩人の思いが込められています。楽譜を読む際にはそうした思いに出会う訳ですが、私はこの音楽というものに、旅をする時と同じような意識の高揚を覚えます。音楽に内在する思いに触れることは、多くの人と出会うこと。逆に言えば、色々な人の思いに触れることは音楽を深めることに繋がります。音楽教員として都留

文に居る私にとって、2018年4月に担任団として始まった皆さんとの新たな旅は、何と深い学びの連続であったかと、今振り返っています。

都留はあたたかな土壌で、もしかすると切磋琢磨が足りない環境であったかもしれません。しかし縁あって出会えた全国から集った友人、サークルの仲間、アパートやアルバイトなどでお世話になった都留の皆さん、そして私が見ても学生想いの熱い教員たちと過ごした時は、掛け替えのないものであり、多面的に活躍できる人間力が培われたはずです。少し不安げな様子であった入学当初から思うと、何と逞しく成長したのかと皆さんを眩しく見つめています。皆さんに感謝と祈りを捧げ、新たな旅立ちにエールを送ります。



地域社会学科 第1期生を送る

地域社会学科教授 西尾 理

地域社会学科の卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんは、地域社会学科の初めての卒業生となります。この学科は、できた当初から想定外のことが判明する度に、担当教員でいろいろ議論してきました。手探りの状態で、1期生と共に作りあげてきたといっても過言ではありません。社会科学や人文科学の多彩な内容を文献学習、プロジェクト研究、フィールドワークといった多様な学び方でクロスさせながら研鑽を積むという、それまでの社会学科（現代社会専攻・環境・コミュニティー創造専攻）の遺産を受け継ぎながらもユニークな学科にしようと努力してきました。

この学科で学んだことがみなさんのこれからの人生においてどう生かされていくのかはみなさん次第です。「卒業」という英単語に commencement とい

う単語がありますが、commencement には別に「開始」とか「始まり」という意味があります。「卒業」はみなさんの人生の「始まり」なのです。勉強もここで終わりなのではなくここからが始まりです。日本政治思想史で有名な丸山眞男の教育哲学は、単なる知識や学識の伝授ではなく、「具体的な事柄を、抽象的思考に置き換える訓練を学生に施し、それを習慣として脳内の思考回路に定着させること。学卒業後も、独学で物事を学び続ける癖を在学中に学生の頭に叩き込む事」であったそうです。また「卒業現象」といって、卒業とともに学問や文化を捨ててしまうことを嘆いていたといひます。みなさんには、ぜひ、卒業後も学びつけてほしいと願っています。みなさんの新たな「始まり」にお祝い申し上げます。



深く、そして広く

大学院文学研究科
国文学専攻教授 寺門日出男

大学院修了の皆さんに、まずはお祝い申し上げます。しかし、この二年間はほぼ全てがコロナ禍の時期であり、研究活動はもとより、仲間たちとの交歓等も思うようにできず、悔いの残るものであったかと思えます。学んできたことが、これからの人生で、果たしてどれだけ役に立つのだろうかという不安もあるかと思えます。

朱子学に「物に格(いた)りて知を致す」という言葉があります。大まかに説明すれば、対象をよく観察し、その理を極めることで、人間の知を発揮させるということです。皆さんがこの二年間研鑽してきたことにも当てはまるのではないかと思います。今まで学んだ基礎研究は、これからの人生において生きてくることでしょう。

今後、自分の専門研究を更に深めていくことも、もちろん大切です。しかし、それだけにとどまらず、芸術・歴史・科学史等、周縁の様々な領域に対する理解を広げていくことによって、以前には気づかなかった新たな発見があると思います。朱子は、この世のあらゆるものに理があり、その一つ一つに「知を致」すことによって聖人の境地に近づける、とも言っています。もちろん、皆さんが聖人を目指すわけではないでしょうが、自分の殻に閉じこもることなく、一つ一つ自分の知の世界を広げていくことが、人間的な成長に、必ずや繋がるものと考えます。皆さんのご多幸を、心からお祈り申し上げます。



旅立つことば



4年間の軌跡と 今後の歩み

国文学科 津金 伽帆

都留文科大学に入学してから早くも4年の月日が経ちました。不安を抱える一方で、待ち望んだ大学生活に胸を躍らせていたことが思い出されます。縛りの多かった高校までの環境から、大学という拓けた世界で、勉学や書道部での活動に励んだ日々はとても楽しく、充実したものでした。

講義に加え、TAや部活動、習い事の手話、アルバイトなどの経験から得られた多くの知見によって今の私があります。特に今年度は、教育実習やSATなど、これまで学んできたことを学外で実践する機会がたくさんありました。また、卒業論文の執筆にあたり、かねてから関心のあった分野における研究の成果と課題を得ることができました。

悩み、立ち止まることの方が多かったように思い



ゼミの仲間と

ますが、教職に就くという志を貫き、試行錯誤しながら乗り越えてきた日々を誇りに感じています。ゼミでお世話になった古川先生をはじめ、文学や教職の素晴らしさを教えてくださった先生方、離れた地から温かく見守ってくれた両親や切磋琢磨してきた友人に、心から感謝しています。恵まれた4年間で

私はこれから大学院へ進みます。修了後には自信をもって教壇に立てるよう、着実に歩みを進めていきたいです。



「追求」と 「感謝」の4年間

英文学科 足立 和音

都留の街並みの至る所に大学時代の思い出が溢れており、もうすぐこの場所を離れると思うと胸が苦しくなる。思い返せば、ここで過ごした4年間は、周囲の人や環境に恵まれ、自分の「やってみたい!」を追求できた貴重な期間だった。

その一つが、スペイン語学習だ。入学当初から興味があり、授業はもちろん、2回の語学研修への参加を通じて語学力の向上に努めた。目標であった長期留学はコロナの影響で中止となり、非常に悔しい思いもあったが、友人や先生のおかげで学習へのモチベーションを高く保つことができた。いつかまた、そのチャンスを掴みたいと思っている。

また、世界の様々な種類の英語に関心があり、ゼミでは World Englishes に関する研究を行った。研



語学研修中グラナダ旅行で友人と

究を通じて自身の英語能力を磨けただけでなく、英語そのものに対する認識を深め、集大成として論文を完成させられたことは、英文学科生としての自信に繋がった。

文大で得た学びや経験、人との縁を大切に、今後も精進していきたい。最後になりましたが、4年間の学びを支えてくれた両親、ご指導いただいた先生方、一緒に学んだ友人たちに、心から感謝申し上げます。文大を卒業できることは私の誇りです。ありがとうございました。



成長することのできた 5年間

比較文化学科 工藤 花

大学で過ごした4年間は、私にとって多くの決断と選択をした期間となりました。特に3年次を休学し、フィリピンに留学したことは大きな成長につながったと感じています。最初の半年間は、現地の法務省保護観察局のインターンとして活動しました。そこでは、犯罪に手を染めた人たちの社会復帰を支えるプログラムに参加しました。以前より興味があった貧困問題や犯罪社会学について学びを深めることができました。

しかしフィリピン留学を決断するのは簡単なことではありませんでした。入学してから出会った友人たちと離れることが何よりもつらく感じられたからです。特に留学を選択することによって、大切な同期と一緒のタイミングで卒業できないことは私を悩



フィリピン留学で出会った友人とともに

ませました。しかし友人たちは背中を押してくれ、暖かく送り出してくれました。また、帰国後も友人たちとの関係性は変わりませんでした。私の大学生活は、周りの人たちの暖かさに支えられていました。本当に感謝しています。

特に軽音楽部の皆様、佐藤ゼミの皆様、この場を借りて感謝申し上げます。



ダイバーシティに囲まれて

国際教育学科 松本 大輝

高校までと比べて、大学では学生に限らずよりたくさんの多様な人々と出会った。国際教育学科2期生として入学し、国際交流会館に入居した。そこでは、これから留学に行く都留の学生や留学生たちと共に生活し、色々な言語でのコミュニケーションを通して絆を深めることができた。一年生の後期には北欧からの留学生を様々な企画をもって受け入れ、二年生の後期には、スウェーデンへ留学した。

大学で得られた力について「キー・コンピテンシー」を軸に考えると、「相互作用的に道具を用いる、異質な集団で交流する、自律的に活動する」の三つのカテゴリー全てが汎用的に養われたと感じる。様々な価値観や異なる背景を持った人々との交流の中で、違いを違いとして認め受け入れる、英語



留学先でのルームメイトと

など多くの言語を用いてコミュニケーションを行い、主体的に行動するというのが自然とできるようになったと感じる。

ダイバーシティに囲まれて、たくさんの人と繋がり、多くを学び、そして、大きく成長したと感じられる大学4年間であった。



音楽とともに、 教育とともに

学校教育学科音楽専攻 宇佐美 遥

ふるさとの山形を離れて4年。「部活動で合唱を続け、音楽を学びながら小学校教員になる」という夢の実現に向けて過ごした都留での毎日は、貴重な時の経過でした。

学校教育学科では、教育フィールド研究で現場に出て児童と接する機会を得る中で、時には自分が教員になれるのかと不安を抱き戸惑うこともありましたが、現場経験の豊富な先生方からご教授いただいたこと、また数々の講義や教育実習、教員採用試験に向けて奮闘する中で、児童理解の大切さや、教育の奥深さを改めて感じることができました。

音楽系では声楽ゼミに所属し、イタリア歌曲やオペラに取り組みましたが、声楽の技術だけではなく、楽譜の内外に秘められた表現の可能性、そして粘り



声楽ゼミの仲間と

強く音楽に向き合い続けることの素晴らしさを学ぶことができました。仲間とともに真剣に音楽に取り組めたことは、自分自身を大きく成長させてくれたと感じています。また学生指揮を務めた合唱団では、全国大会連続金賞受賞に貢献できたことも喜びでした。

春からは地元で、教員として新たなスタートをきることになります。都留での多くの人や音楽との「出会い」を支えとし、これからも自分らしくあり続けたい、と思います。



かけがえのない4年間

地域社会学科 清水 美希

地元にある都留文に入学し、期待と不安に胸を踊らせたあの日から、気づけば4年もの月日が流れ、あっという間に卒業を迎えた。

学生生活を振り返ると、その日々にはたくさんの出会いや思い出、支えてくれる方々の存在があった。特に所属していたバレーボールサークル「こめっと。」で過ごした時間はとても充実していた。学年・学科を超えて100人以上の人と出会い、かけがえのない友人ができただけでなく、様々な人の価値観や考え方に触れ、人として成長することもできた。また、入学時に新設された地域社会学科での多彩な学びは、幅広い知見と成長をもたらしてくれた。特に、実際に現地に行って調査を行うフィールドワークや全国から集まった個性溢れる同期と切磋琢磨し



サークルの仲間と

ながら励んだ環境社会学ゼミでの時間は記憶に色濃く残っている。

春から社会人としての新生活が始まるが、私にかけがえのない出会いや新たな知見、成長、可能性をもたらしてくれた都留文での経験を糧に、前進していきたいと思う。最後に、伸長唯先生や友人、家族をはじめ、関わってくださった全ての方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



広く深く確かな力に

文学専攻科 教育学専攻
大畑 済

学部で4年、専攻科で1年を都留文科大学で過ごし、勉学やサークル活動を通してたくさんの人と出会い、多くのことを学びました。特に、専攻科での1年間は知識や考えをより深めることができたと思います。

私は、学部時代に教育の基礎を学び、教育実習などを経て、もっと教育について学びたいと思い、専攻科に進学しました。この1年で教育学や教育実践、特別支援教育など今まで深く触れてこなかった領域について学び、教科教育についても学部で専攻していた算数・数学だけでなく、他教科についても学び、教育を広い視野で考え、学ぶことができました。また、自身の研究では算数教育について、「児童が算数を好きになる」「算数を楽しい、面白い」と感じ



サークル活動の様子

る授業について研究することができ、理想の算数教育の形を定めることができました。この専攻科での学びは、これからの教職生活において確かな力となりました。

大学生活を支えてくれた家族、楽しい日々を共に過ごした先輩、同級生、後輩、丁寧な指導をしてくださった先生方に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



学ぶということ

大学院文学研究科 国文学専攻
大塚 祐奈

最初に都留に来たときは、こんなに長居をするつもりはなかったのですが、気付けば6年も経っていたことに驚きます。院に入ってから、特に時が経つのが早かったように感じます。

私が大学院への進学を決めたのは4年の夏のことでした。あまりにも唐突に、しかも考えなしに決めたものだと思ってしまう。

そのため、何もかも足りていない自分と周囲の方を比較したときに、他が揃いも揃って優秀に見え(実際優秀な方ばかりです)、そのことを苦しく思う日もありました。しかし、それ以上に自分が刺激され続けることは良い結果をもたらしたようで、もがく中で「考えること」とは何かを多少なりとも理解できたことが、小さいながらもこの2年間で得たもの



授業風景

だと思っています。学びを通して自分の未熟さを痛感する大学院生活ではありましたが、それこそが学びの本質なのだと思います。そのことを忘れずに新天地でも励みたいです。

指導教員である寺門先生をはじめ、大学で講義をしてくださった教授の方々、友人、多くの人に支えられ、無事に修了を迎えることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。6年間ありがとうございました。



住めば「都」、 「留」まること6年

大学院文学研究科
社会学地域社会研究専攻
高橋 将貴

住めば「都」、「留」まること6年。この6年間の大学及び大学院生活は大変充実したものでした。学部時代は部活動に励みました。毎朝7時から始まる練習に加え、授業の合間を縫ってテニスコートですごした仲間との時間は、今でも自分にとって素敵な思い出です。

大学院では、修士論文の執筆や授業の予習に明け暮れる日々でした。指導教官の鈴木哲雄先生をはじめ、多くの先生方との講義を通じて、大変多くのことを深く学ばせていただきました。また、後輩である坂本良哉さんと嶋本貴瑛さんには、私の研究報告に対して、毎度鋭い指摘をしてくれました。同期がいない身として、2人の意見は大変貴重なもので



大学院の授業の様子

した。大学院の先生方や後輩2人には、本当に感謝しています。

最後になりますがこの場をお借りして、大学院まで進ませてくれた家族、部活動の仲間、大学院の先輩後輩、そして温かく丁寧なご指導をいただいた先生方に、改めて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



An Unconventional Graduate School Experience

大学院文学研究科 英語英米文学専攻
Francine Chloe Ramirez

The title says it all. In no way was my experience in graduate school conventional or average. Like many students in 2020, I started my academic journey in Tsuru University in the midst of a global pandemic. It was indeed shocking, having to quickly adapt to the remote and online setting. I was lucky enough to get to know some of my colleagues in the English Department, and the camaraderie and teamwork that proceeded was bountiful.

Together, we graduate students trudged over the mountains of challenges that came our way. Some of us were international students, and one of the main hurdles we all deeply felt was the urge to visit home during breaks and holidays when we couldn't. There were times when I felt stuck and alone. There were times when I felt like giving up.

It was in these dark, scary moments when I realized that there were so many people cheering me on, not only back in my hometown in the Philippines, but in Tsuru University as well. There were professors, encouraging and kind; there were fellow students, motivated and optimistic



Master's Dissertation Submission

about the future; and there were amazing staff members, always ready to help with anything. Despite all the obstacles, the graduate students managed to create a safe space and community where we could all relax, vent, cry, and laugh together. This made the unorthodox two years bearable.

In these two years, I have learned innumerable lessons, not only about topics in the field of linguistics and language learning, but also in pragmatics, language teaching, and educational psychology. I am so very blessed, humbled, and grateful for having the opportunity to pursue my master's degree at Tsuru University, and I look forward to putting everything I learned over the past two years into practice.



わが道しるべとなりて

大学院文学研究科 比較文化専攻
白 鎮慶

都留での6年間は瞬く間に時が経ちました。この6年間の出来ことはまだ昨日で行ったように鮮明に覚えています。日本に来て7年が過ぎて、そのほとんどの時間は都留で過ごしました。都留は賑やかな大都会と違い、穏やかで静かな町なので、6年間の大学、大学院生活は自分の研究をやりながら、ゆるやかに過ごしてきました。このような生活はとても幸せでした。

私は文大を志願した理由は、伊香先生の下で日本近現代史、特に日中戦争史を勉強するためでした。そして私の願いが叶えて、文大での6年間は先生の指導のもとで、日中戦争史を勉強して、日本の植民地支配について研究してきました。特に、修論を執筆していた時、先生から様々なアドバイスを頂きました。他の先生方の教えも大変勉強になりました。



箱根での卒業旅行

研究者を目指す私にとって先生方の教えはきっと道しるべとなるでしょう。ここで先生方に心より感謝を申し上げます。

そして、文大での様々な出会いも私にとってかけがえのないものでした。大学の先輩、後輩、またゼミの仲間たちと出会ったことによって、私は多様なことを経験して、成長してきました。彼らのおかげで文大での生活は一生も忘れられない宝物のような記憶となりました。最後に、文大で出会った方々に深く礼を申し上げます。



都留での学びを胸に刻んで

大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻
高木 あか音

大学院に進学してから、新型コロナウイルスの影響で、思い描いていた大学院生活とは違う毎日を過ごすことになりました。このような状況の中でも、zoom等を通して大学院の授業を受け、議論を重ねていく中で、自分自身の教育に対する知識や考え方が一面的なものであったことに気づかされました。臨床教育実践学専攻での学びは、私の一面的な教育の見方を解きほぐし、多様な見方や考え方を与えてくれました。

指導教員である廣田健先生には、学部生のころから大変お世話になりました。熱心で丁寧な先生のご指導のおかげで、新しい視点を得ることができました。また、同学年の國府田怜さんには、とても感謝しています。修士論文を作成するときには、悩んで



廣田ゼミの仲間と共に

いた私の話を聞いてくれ、本当に感謝しています。

大学、大学院と都留文科大学で過ごした6年間は、あっという間に過ぎました。初めての一人暮らし、大学1年生の頃、ホームシックでよく泣いていた私が、6年も都留の地で過ごせたのは、友達や先生方、大学の事務の方、大学生活の中で出会った方々のおかげです。この場を借りて、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

令和3年度 卒業論文・研究論文・修士論文題目

氏名表記については、原則本学学内システムで使用する「Unicode (UTF-8)」で表示可能な文字で表記しています。

初等教育学科

内山 美恵子ゼミ

- 小林 稔 都留市朝日川流域与縄地区における崩壊地形の形成と災害予測
福永遼太郎 朝日川の流出特性とその年間変動

上原 明子ゼミ

- 菊池 航平 小中学校の英語教育におけるゲーミフィケーションの活用

佐藤 隆ゼミ

- 野村 祐希 校長のリーダーシップと学校運営改革

十川 菜穂ゼミ

- 加藤 綾 音楽科におけるインクルーシブ教育システムの実現

竹下 勝雄ゼミ

- 小林 あみ 子どもの多様性に対する指導の在り方

鳥原 正敏ゼミ

- 鈴木あかね 手仕事を持つ多面的な役割についての一考察
ー幸福を感じる学びづくりー

藤本 恵ゼミ

- 三枝 竜也 宮崎駿『風の谷のナウシカ』論
ーナウシカの「役割」と物語の変遷ー

邊見 信ゼミ

- 松本真由美 教師と保護者との関係構築
ー山崎隆夫による居場所づくりの実践からー
小野駿之介 変容する社会とコミュニティー・スクールの在り方について

国文学科

上代文学 鈴木 武晴ゼミ

- 梅原 なな 上代の「恥」の文学と文化
岡田 一花 古事記における数と世界観
川口奈々美 万葉集における鳥
河本 巧 『古事記』黄泉国の食文化と生命性
ー「黄泉戸喫」の意義ー
小林 叶佳 稲羽の素戔考
佐藤 沙織 万葉集 3358 番歌の別伝歌における伊豆の高嶺考
塩澤久留美 上代文学における異界
ー根の国についてー
長坂菜里南 万葉集における萩と鹿の関係性
中島 未来 万葉集における色
中田 真由 「常世国」考
長山 愛理 万葉集における「風」
南雲 風香 『万葉集』の恋の和歌と万葉びとの生活との関わり
野中 鮎奈 万葉集の枕詞と笠郎女との関係
深沢 優花 上代文学の祓いと禊ぎ

中古文学 長瀬 由美ゼミ

- 雨宮 理紗 『源氏物語』における光源氏と藤壺の関係性
大友 美侑 光源氏との出会いから読む女性の人物像
小笠原亜美 『落窪物語』と『おちくぼ姫』
桑原 初音 『落窪物語』の女房「あこき」の役割について
河野 一謹 『枕草子』をめぐる作者・清少納言の宮仕えと女性観について

- 崎浜 由依 『権記』に見る藤原行成の人間性
高橋なつき 『源氏物語』における女子教育について
本多 葉月 『源氏物語』における「にほふ」
松本 美優 巻名から見る『源氏物語』
森 知里 明石入道の言動の理由
小林 萌芽 紫の上の「祈り」について

中世文学 佐藤 明浩ゼミ

- 阿部 風花 名笛をめぐる説話と伝承
ー源博雅を中心にー
吉田 芽生 『蜻蛉日記』における鶯と時鳥
菅原 優斗 『玉水物語』『紅葉合』の研究
ー異類婚姻譚との比較を通してー
杉山智絵里 『義経記』におけるフィクションの刀剣が持つ意味
豊増 華歩 連歌師心敬を考える
ー「幽玄」から「時雨」を詠むまでー
針谷かなえ 御伽草子『一寸法師』考
ー食物の策略の場面を中心にー
宮下 空 能因法師『能因集』考
渡辺 友基 『平家物語』における義仲像

近世文学 加藤 敦子ゼミ

- 外園 恵理 近世における『古事記』の受容
ー『古事記頒題歌集』を軸として
石川 千智 『三人吉三郎初賀』お嬢吉三について
岡田 直人 『好色一代男』における「食べ物」の機能
兼宗 遥 草双紙における『曾我物語』の享受
ー場面と画題を中心にー

近代文学

小野寺絢香

高橋 龍夫ゼミ

寺山修司『田園に死す』における短歌との別れ

近代文学

高橋龍夫・古川 裕佳ゼミ

加藤 空

高橋 万葉

津金 伽帆

前田 薫

前田 香蓮

丸山 輝

甘利 りこ

金田 彩美

木沢 智子

小川洋子『薬指の標本』論

多和田葉子「献灯使」論

村上春樹『スプートニクの恋人』論

太宰治「葉桜と魔笛」論

宮澤賢治「よだかの星」論

吉屋信子『花物語』『フリージア』論

萩原朔太郎『日清戦争異聞』論

梶井基次郎『ある心の風景』論

『芋粥』論

近代文学

野口 哲也ゼミ

田中 美咲

小粥 柚香

長田 じゅりあ

「瓶詰の地獄」論

一書簡体形式の効果と意味―

中原中也「春日狂想」論

一不調和から捉え直す「狂想」―

宮沢賢治「よだかの星」論

一星になるということ―

金子日向子

太宰治「皮膚と心」論

一空転するコミュニケーション―

小柳 志織

正宗白鳥「入江のほとり」論

一残留者と出郷者の「家」―

佐藤 瞳

梶井基次郎「Kの昇天」論

一分裂する自我と昇天の希求―

佐藤 真帆

三島由紀夫「美しい星」論

一「宇宙人」的思考の先にあるもの―

新海 友都

夢野久作「空を飛ぶパラソル」論

一虚実の境界―

角 拓哉

交錯する三人の宮澤賢治

一「銀河鉄道の夜」を中心に―

玉井 海帆

野溝七生子「山柵」論

一閉ざされた家庭をひらくもの―

波形ひなの

泉鏡花「龍潭譚」論 一境界が示すもの―

若尾 幸真

谷崎潤一郎「春琴抄」論

一語られる虚像の春琴―

阿部 美里

芥川龍之介「袈裟と盛遠」論

一独白による表面化―

船津 実夢

萩原朔太郎「猫町」論

一新しい詩の形―

近代文学

吉田 恵理ゼミ

関根 純寧

桜庭一樹『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』論

一ジェンダーから見る桜庭一樹―

青柳 百音

言葉によらない対話の表現

一瀬尾まいこ『僕の明日を照らして』を中心に―

上田あいり

組み込まれた物語性

一谷川俊太郎『トロムソコラージュ』論

大川 瑠捺

綿矢りさ作品における女性像

一『勝手にふるえてろ』を中心に―

奥山 雛子

山田詠美『放課後の音符 (キイノート)』論

華 朱亮

虚実の狭間に

一『孤島の鬼』から見る乱歩作品における空想と現実

鎌田 愛美

桜庭一樹の少女少説の世界

一『青年のための読書クラブ』論―

坂本 海優

三秋縋『君の話』論

針谷みなみ

長野まゆみ『テレビジョン・シティ』論

一解放をめぐる闘い

弘野 貴行

梨木香歩『西の魔女が死んだ』論

前田 千春

太宰治「女生徒」論

一矛盾する「私」の有り様―

若宮 慎朔

野崎まど『バビロン』論

国語学 古代語

加藤 浩司ゼミ

山田 歩菜

「ちがう」などの相違を表す動詞の意味用法の差異

及川 恋

「仮名貞観政要」における漢数字の読み

大沼 美幸

接続詞「カルガユエニ」と「ユエニ」について

金澤 久実

古典におけるオノマトベについて

桑原 亜依

身分や品格に関することば「あて」「気高し」「やむごとなし」について

柴田 紗希

「期」と関連する語について

下澤 恵

平安鎌倉時代の諸文体における「(～) 難し」

水島 諒佑

日本語の話芸における言語操作

一おかしみの生成―

山岡 姫佳

諸作品における「行く」と「言ふ」の同音衝突回避について

渡邊 莉央

中古・中世の仮名文学における「ゴトシ」と「やうなり」の使用状況

国語学 近代語

中川 秀太ゼミ

飯塚菜々子

テレビアニメ「魔法つかいプリキュア!」のセリフにおける助詞の省略

稲垣 佐京

方言による各表現が聞き手に与える印象

枝川 真依

農作物の品種名における傾向と女性的なイメージ

海老澤直弥

ゲーム「ポケットモンスター」における音象徴について

大友 円華

岩手県気仙地方の方言における命令表現と依頼表現

木原 優

ニュース番組における無助詞の実態

庄司 丞究

「敷居が高い」の意味変化

田島 諒子

会話の中での語の反復

田村 奏人

戦前・戦後の国語科における方言教育の変遷
ファッション雑誌における「こなれ感」とその周辺の意味・用法

鶴田 真也

中村健太郎

富山県の公共交通機関における言語景観について

中谷 琉風

都留文科大学学生におけるバイト敬語の使用意識

吉田 未来

富山県高岡方言における終助詞の使用実態

漢文学

寺門 日出男ゼミ

荒川 兼汰

中井履軒撰『大学雜議』について

砂金 梨果

始皇帝像の変遷について

竹下 彩香

司馬遷の武帝批評

国語教育学 野中 潤ゼミ

- 山畑 光叶 教育現場に空間のアップデートは必要か？
荒井 美宇 教材としての『トカトントン』
—文学教育の意義と可能性—
伊藤 颯汰 オンライン化に伴う書くことの重要性について
栗田 大河 教育の地域格差
—岐阜県の圏域間格差—
小嶺 春奈 国語科の中での方言教育の在り方
—琉球方言を中心に方言教育の実践法を考える—
菅谷 耀 ディズニーのプリンセス映画におけるプリンセスとジェンダー
竹屋 真珠 「マードーミステリー」の教育への利用を考える
福井 多恵 ネット社会とポジティブに向き合うためのSNS教育・情報モラル教育
伏見 遥貴 シンキングツールを用いた高等学校国語科「書くこと」の指導
益村 優 自閉症スペクトラム症をもつ児童・生徒へ国語科としてできる指導、支援
三島 紀子 青少年読書感想文全国コンクールに見る現代の読書感想文教育の有効性と一提案
吉崎 蘭香 高等学校における古典教育についての研究
渡邊 瑞葵 中学校国語科における書くことに対する苦手意識の軽減

日本文化 岩下弘史・菊池有希ゼミ

- 黄 倩 夏目漱石『夢十夜』と民俗学の関わり
—「第一夜」を中心に—
秋吉 晴菜 坂口安吾と親鸞
—『墮落論』と『歎異抄』を中心に—

英文学科

小室 龍之介ゼミ

- 上山 遊 マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』における女性の描かれ方
中 笑夏 『アルプスの少女ハイジ』にみる日本の宗教観
中田 俊哉 『緋文字』の構造と象徴
萩野 彩 『わたしを離さないで』における「生きる」とは
—原作とドラマを比較して—
宮澤 朱希 「幸福な王子」他人の存在と自己犠牲
森山 真澄 *Kitchen* に見る吉本ばななの言葉についての評価と翻訳の可能性の考察

大平 栄子ゼミ

- 稲福 真琴 *Tiana Norgren* の生殖の政治学の研究の落とし穴
—戦後日本における避妊法の多様化—
今江 晴菜 W.E.B.Dubois の社会主義と共産主義思想
上原 志野 *The Paper Bag Princess* から学ぶジェンダー絵本のあり方
川上 希枝 *Jane Eyre* にみる女性の自立
竹村 彩花 歌詞から考察するジェンダー観の変化
—ディズニーソングの歌詞分析を通して—

- 植松 千恵 宮澤賢治「蜘蛛となめくぢと狸」および「洞熊学校を卒業した三人」における競争
—アンデルセン「かけっこ」と比較して—
勝股野々花 遠藤周作『海と毒薬』におけるフランソワ・モーリアック受容
—勝呂の視点に注目して—
糸 昂希 伊藤整におけるD・H・ロレンスの愛の思想の影響
—『感傷夫人』と『チャタレイ夫人の恋人』の比較を中心に—
小林 蘭 遠藤周作「雨も、また」と弱者
—田中の分析から見えるもの—
佐藤 歩 吉屋信子『花物語』分析から見える〈エス〉
佐藤 陽希 芥川龍之介『藪の中』における主題
—アンブローズ・ピアース『月明かりの道』との比較から—
清水 李帆 太宰治『ヴィヨンの妻』における戦後を生きる女性像
—映画『ヴィヨンの妻〜桜桃とタンポポ〜』と比較して—
瀬戸 祐穂 近代における源実朝受容
—太宰治『右大臣実朝』分析から見えるもの—
高橋 雅 遠藤周作の「母なるもの」へのまなざし
—『王妃マリー・アントワネット』における三人の女性の分析を通して—
恒川 葵 中島敦『古譚』におけるスティープソン受容
—「存在の不確かさ」を中心に—
茂木 佳穂 永井荷風『新婦朝者日記』における西洋音楽受容
—春子の存在をめぐって—

- 中村 仁美 生理用品の広告とジェンダー
中村 莉緒 職場でのセクシャルハラスメントに立ち向かう女性たち
—*North Country, Bomb Shell* を中心に—
西澤 友乃 *My Intern* にみる働く女性が抱える問題
幡野 瑞季 *Little Women* と *How to Be Single* に見る女性表象
—結婚制度に女性は縛られているのか？—
松浦 翠 ディズニー映画からみる恋愛観の変化
水上 華奈 *What Works* 行動経済学からみるジェンダーフリーな社会
柳田 遥香 *The Power* にみる女性の強さ
山本さくら *Anne of Green Gables* と *A Little Princess* のヒロイン像比較

加藤 めぐみゼミ

- パスカル アミエル アートからみる「ほんもの」という言葉のゆらぎ
伊藤 亜美 『ロミオとジュリエット』翻訳比較
今西 涼 ルイス・キャロルと夢と現実—表象としてのアリス二部作
小池明日香 カズオ・イシグロの描く〈ヒューマン〉と〈ポストヒューマン〉

小泉 天空	イシグロの分身としてのウィスタン『忘れられた巨人』においてイシグロが掘り起こさんとするもの
宗 穂沙葉	ディズニープリンセスにおけるジェンダーと人種の多様性
辰ノ口美咲	中国の「栄光」と斜陽 ～日本の明日はどっちだ?～
奈良岡吉乃	『クマのプーさん』をめぐる親子の関係 ～天才の父と幼くして有名になった息子～
西田 慧	『クララとお日さま』から考える「人間らしさ」
細川 佳恵	Possibility of the Existence of "Herstory" in <i>The Handmaid's Tale</i>
本間菜々子	『インドへの道』に見る他者理解の不可能性
松本 啓人	ジョージ・オーウェルの世界から見る 21 世紀の世界
村山 凜	映画 <i>Little Women</i> における女性の苦悩と現代日本女性の生き方
森山 光太	フランクフル学派から読み解く『嵐が丘』 ——ヒースクリフ「自己超越」までの道のり

竹島 達也ゼミ

大川 水帆	David Henry Hwang の劇作品から読み解く、中国系アメリカ人の困難
根来 菜月	現代アメリカ演劇から見る黒人差別 — <i>Dutchman</i> と <i>No Place to Be Somebody</i> と <i>Hairspray</i> を中心に
石川 仁湖	<i>Dear Evan Hansen</i> から見る現代のメンタルヘルスケアと SNS の二面性
大村 仁奈	『ウエストサイド物語』、『イン・ザ・ハイツ』に見るアメリカ移民社会
神山 真希	<i>The Color Purple</i> と <i>Ruined</i> から見る黒人女性の差別
岸 弥映	<i>Microaggressions in Disgraced and Gentleman's Agreement</i>
竹山優里花	<i>Billy Elliot</i> と <i>Annie</i> から見る大人と子どもの関係性
戸沼 瑛弥	The Light for Loneliness of New York in the Plays of John Patrick Shanley, Edward Albee and Israel Horovitz
福田 詩音	<i>A Raisin in the Sun</i> と <i>Clybourne Park</i> から見るアフリカ系アメリカ人の居住環境を巡る諸考察
盛原 比奈	アメリカ社会における女性像の変遷 — Wendy Wasserstein の劇作品から見る生き方の選択肢 —
村上 芙慈	～ Class Society in <i>Pygmalion</i> and <i>My Fair Lady</i> ～

儀部 直樹ゼミ

加茂田三奈	『天国の五人』から見た死後生
佐藤みのり	ミッチ・アルボム作品に見る死の恐怖からの脱却
白石真由佳	<i>Many Lives, Many Masters</i> — 「前世療法」がもたらす死生観 —
杉本 菜摘	『天国の五人』から見る人の生きる道
鈴木 悠太	コトダマ— どうして人は見えない力を信じるのか
高木 璃乃	『魂の伴侶』を通して学ぶ、人とのつながり
高橋 佳子	死の受容からの学び
高橋 菜鈴	生きがい論から考える死を選択することについて

多氣佑一郎	若者の死を考える
竹内 朱音	『時の番人』を通して、死と人生に向き合う
長倉 怜央	『モリー先生との火曜日』から見る人生観 ～死から逆算する生きがい論～
安宮 裕人	人生を支える生きがいについての文献的研究

鷲 直仁ゼミ

及川 立	ラファエル前派の体現者 — ウィリアム・ホルマン・ハントの考察
小野 巧	ラファエル前派が 19 世紀芸術に与えた影響
金井 樹里	アンリ・マティスが及ぼした現代アートへの影響
後藤 悠	バンクシーが現代社会に与える影響について
志賀 理恵	19 世紀のヨーロッパにおける日本文化の影響
杉山和津実	19 世紀イギリス文学・文化から見る価値観の変遷
田村 想	印象派の女性画家からみるジェンダー
丹治 遥香	2.5 次元舞台を中心にみる、舞台演劇の歴史と必要性～比較文化の見地から～
永田 藍	サンリオに見る子供から大人まで愛されるキャラクターデザイン — kawaii の視点から —
根本 美柚	ペットの繁殖・飼育の現場と今後の課題 — 動物愛護王国イギリスとの比較 —
藤澤 匠	The Influence of the Pre-Raphaelites on the Art and Culture of the 19th Century England
山川あずさ	ジブリ映画の日英翻訳にみられる比較文化
渡邊 夢花	映画ポスターから見る日英文化比較論

中地 幸ゼミ

荒木 佳恵	Loss of Identity in <i>Wide Sargasso Sea</i>
鶴田 紗菜	映画 <i>Fire</i> から見るインド社会を生きる女性達
真坂 優奈	<i>Paradise</i> における共同体と平和
柳澤 亮弥	<i>No-No Boy</i> における日系アメリカ人たちのアイデンティティ
米山あかり	Nella Larsen の <i>Passing</i> における混血の苦悩

Evans, Hywel ゼミ

杉山 萌	The Japanese relationship with nature: Comparison with western culture
伊東 七彩	Love from a marketing perspective
金谷 陽花	Differences in attitudes toward beauty by ethnicity: Looking at how different aspects of beauty differ by ethnicity
岩下 さら	The Relationship between language use of negatives and culture: Comparing Japanese and English
桑原 由花	World Englishes: The Philippines and Japan
郷間 美海	The Influence of Englishization on Japan
田中 星来	English dialogue in Ghibli movies
高橋瑞那子	The impact of language use on people
西家 帆波	Identity and speech patterns: Comparing stand-up and <i>manzai</i>
野田 実佑	Language and the baby's brain
野村 来雛	Differences between original scripts and Japanese subtitles
畑中みなみ	Suggestions for improving Japanese Subtitles
林 美佑	Difficulties Learning English in Japan

- 山根 夕葉 Considerations on Second Language Acquisition
～ How Shadowing can improve English learning
in Japan ～
- 吉田 智洋 Psychoanalysis of Shinji Ikari in the Evangelion
movies

福島 佐江子ゼミ

- 星山 実玖 親しい対人関係におけるポライトネス
—ジェンダーの観点から—
- 沼里 菜月 SNS における依頼に関する一考察：絵文字
の役割と効果を中心に

Olagboyega, Kolawole Waziri ゼミ

- 金屋 遥 The Origin, Spread and Dialects of British English
- 中村 文哉 A Comparative Study of New Zealand English and
British/American English
- 足立 和音 The Epistemology of "Liberation Linguistics" and
"Deficit Linguistics"
- 宇野 遥 Factors Responsible for Willingness to Communicate
in English Classrooms in Japan
- 加藤 沙織 World Englishes: Cultural Implications of
Teaching English in EFL Contexts
- 木下 蓮万 Linguistic Analysis of English Pronunciation in
Japan: Implications for Teaching and Learning
- 小須田 彩 Factors Responsible for Low Motivation in
Second Language Learning
- 佐藤杏太郎 The Historical Development of English Language
Foreign Language Teaching: Theories,
Approaches and Methods
- 下形 航輝
- 谷口 颯 A Comparative Study of Japanese and English
Word-formations
- 成田 愛実 Cultural Influence on the Syntactic Structure of
English and Japanese in English Movies
- ノーブル 未来 ジェイムズ
Second Language Acquisition: Effective
Approaches to Learning a Second Language
- 平野可那子 Second Language Acquisition: Approaches and
Methods for Teaching a Second Language
- 山口 孝紀 Effective Approaches to Teaching a Second
Language

三浦 幸子ゼミ

- 安住 悠 Considering the New Course of Study for
Elementary English Education
- 日山 恵美 Exploring a Language Task for Developing
Critical Thinking and Self-expression Skills
- 松本 岳志 A Study on the Vocabulary Learning through
Extensive Reading
- 阿久澤杏奈 Exploring Benefits and Limitations of Returnees
in Learning English as a Foreign Language
- 大崎和歌子 Analyzing the Entrance Examinations of English
for Public High Schools in Kochi Prefecture
- 亀井 佳音 Effects of Storytelling in Elementary English
Education
- 小金澤惇矢 The Effect of Using Affix for Second Language
Vocabulary Acquisition
- 高橋 来実 The Differences between Children and Adults in
Acquiring a Second Language
- 瀧澤 杏樹 Considering Cross-curricular Learning Plan in
Elementary School English classroom
- 田中 大貴 A Study of Guessing the Meaning of Unknown Words
- 中平 達也 Considering Teacher Roles in Interactive Activities
in Junior High School English Classrooms
- 福嶋 駿人 Gender Bias in Junior High School English
Textbooks in Japan
- 峯岸 翔 Considering School Refusal Students' Actions:
Personality Psychology Perspectives
- 村田 優奈 A Study on Learning English with Music
- 森内 弥恵 Japanese EFL Learners' Perceptions of Recasts
and Uptake
- 高橋 寧夫 Exploring Students' Writing Skills through
Dictogloss

Gillies, Hamish Edward ゼミ

- 秋山 美咲 How does having a mix of current cultural selves
impact on the creation of ideal L2 selves?
- 東 優佳 English as an official language in the Japanese
workplace: actual benefit or mere PR stunt
- 木下 真帆 The relationship between emotion and motivation
in studying English
- 齊藤 緋里 How are effective impromptu speaking activities
conducted?
- 坂上 陣哉 A study of the position of "women" in Japan
- 佐藤 銀仁 Research on language and gender differences in
English
- 正武田めい Women's empowerment in Japan
- 菅原海希也 How has the Covid-19 pandemic affected
institutional L2 learning in universities in Japan
- 隆島 雛乃 The influence of Katakana on the acquisition of
English by native Japanese
- 高瀬 実来 The influence of Maori culture on New Zealand
education
- 野田 円花 Untranslatable words in Swedish and Japanese
- 田端 紗季 Second language acquisition: The effectiveness of
incidental vocabulary learning through the use of
English songs

社会学科

現代社会専攻

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

- 佐藤 佑樹 『いじめ論比較・検討』
鶴岡 宏海 エルネスト・ラクハウの変容、あるいは「来るべき左派」のため

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 李 渡熙 日本の学校におけるダンス教育の問題点
～日米韓のダンス教育の比較から～

公共政策論 高橋 洋ゼミ

- 太田 武志 都市型排気ガス規制の類型と政策過程
～東京とロンドンを比較して～
行木麻里亜 農地集積はなぜ進まないのか？
～成功事例と失敗事例の比較から～

比較文化学科

伊香 俊哉ゼミ

- 高瀬 和生 「慰安婦」問題の展開とアジア女性基金
野澤 真季 日本の植民地言語政策にみられる特殊性
～英米仏との比較から～
荒岡 夏泉 日本のフィリピン占領がもたらしたもの
～占領政策と被害の実態から～
鄭帆均정범균 日独はなぜ敗北したのか
～第二次世界大戦期の補給問題を中心に～
高橋 賢吾 第一次世界大戦考
～開戦経緯と同盟国敗北原因を中心に～
中田 望来 戦時下における音楽の統制と動員
中村 萌 戦争における死の「残酷さ」とは何か
～15年戦争における多様な死の形態から考える～
沼沢 菜由 十五年戦争期のメディアの戦争責任
～新聞とラジオを中心に～
花生 雅楽 「植民地責任論」から見た戦後日韓関係
平岡 凌 ナチスのユダヤ人管理と抵抗
～東欧のゲットーに焦点を当てて～
三橋宗一郎 「満州国建国」の経緯と思想
林 宏 程 戦後中国に「留用」された日本人
～共産党、国民党双方のケースから～
和崎 友哉 戦前初等教育史の中の国民学校
～皇国民錬成教育の評価を中心に～

内山 史子ゼミ

- 荻野 裕也 南シナ海問題から見る ASEAN 統治の成果と課題
及川菜々子 多民族国家シンガポールにおける言語政策と国民のアイデンティティ形成
～シンガポールの英語化と Singlish をめぐる運動を中心に～

憲法 樋口 雄人ゼミ

- 竹永 隼也 校則問題に関する考察

環境・コミュニティ創造専攻

地域経済論 両角 政彦ゼミ

- 関 唯伽 外国人技能実習制度の運用を通じた途上国への技能移転とジェンダー
～日本の中小企業を事例に～
林 哲平 住民自治によるまちづくりの在り方
～伊勢市河崎を事例として～

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

- 渡邊 菜葉 山梨県内の駅バリアフリーと情報取得手段の現状

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

- 森川 昭一 御殿場観光の実態と課題

- 柏木あかり プミプトラ政策がマレーシアの経済格差に与えた影響
河西 蒔子 フィリピン社会の家族・親族ネットワークによる相互扶助の役割
川本 梨布 東南アジア帰国華僑
黄 森 中国普通話の形成と方言
～マカオにおける言語の変遷～
齋藤 陸 タイ深南部の状況とマレー・ムスリム
佐藤 柚羽 東ティモール社会におけるポルトガル語
～ポルトガル語教育の進展と言語の地位変化～
茂田 清華 ロヒンギャ差別とナショナリズム
中森 知花 インドネシアの政治・社会からみるイスラーム
～「イスラーム化」する多民族社会とその影響～
橋本 実春 香港における民主化運動の変容
廣川 奈央 現代東南アジアのハラール認証制度
～マレーシアのハラール認証制度とハラールの「産業化」～

大辻 千恵子ゼミ

- 石井 翔 セクシュアルマイノリティが住み良い社会への一歩として
～同性婚合法化への動き～
石橋 大地 ソーシャルビジネスによる貧困撲滅の可能性
～グラミン銀行とグラミン日本の実践に着目して～
吉田 奈央 日本における入管法の現在
～在留特別許可に着目して～
小西 優貴 ディズニー映画の実写化
～差別をのりこえる契機として～
佐藤 明優 静岡県浜松市における多文化共生の歩み
～公的取り組みを中心に～
渡邊 祐加 ヨーロッパにおけるスカーフ問題
～ムスリムとの共生～

岸 清香ゼミ

- 山口 溪太 ゲームによる地域活性
—富山から始まる参加型「地元×eスポーツ」イベント—
- 岡野 遥香 ポスター／ミュシャに価値を与えた者たち
—1980年代日本における展覧会の流行と少女マンガ作品による「自分らしさ」の承認—
- 高橋 真洋 持続的発展のための産業デザインの可能性
—「燕三条 工場の祭典」が構築する地域ブランド—
- 西田 安利 中国・上海における日本食の受容
—多品種型日本回転寿司チェーンと都市中間層における需給の合致—

齊藤 みどりゼミ

- 小澤 優杏 『クマのプーさん』からみる帝国主義
—児童文学の隠れたメッセージ—
- 金今 璃空 増殖するクトゥルー神話
—際限なき転移と変貌—
- 河村 遼馬 反骨のダンディズム
—ボー・ブランメル、オスカー・ワイルド、三島由紀夫—
- 末永 麻実 『グリム童話』からみる女性表象
—魔女迫害との比較を通して考える—
- 田村 夏星 『赤毛のアン』に隠されたメッセージ
—不朽の名作誕生の背景—
- 中島 桜 サリンジャーの描く戦争
—コールフィールド家作品を中心として—
- 人見 公基 第二言語習得と教育制度の関係性
—フィンランド、韓国、香港と比較して—
- 宮迫 望夢 擬似恋愛の場における女性学
—ホス狂いに陥る要因—
- 安井萌々花 ダンテ『神曲』と美術
—文学を視覚化する可能性—
- 山口 風子 ICTを活用した日本語教育の可能性
—外国人散在地域の外国人児童生徒を対象として—
- 湯野尻 葵 やなせたかしの正義とは
—『アンパンマン』と戦争—

佐藤 裕ゼミ

- 小澤 楓花 日本の若者によるライフスタイルの模索と「文化移民」
—オーストラリアでのワーキングホリデーを事例に—
- 工藤 花 規範と逸脱のはざままで
—フィリピン都市部における生存戦略と選択—
- 豊澤いずみ 廃棄物処理の国際分業
—廃プラスチックの越境移動に着目して—
- 松本 詩歩 途上国支援としてのソーシャル・ビジネス
—日本の製造業によるカイゼンにいたるまで—
- 卯都木詩織 フィリピンにおける社会的上昇移動の困難
—労働市場の「非正規化」と相互扶助に着目して—
- 加藤 光 メガ・スラムは都市経済に「役に立つ」のだろうか？
—ムンバイ、ダラヴィの事例から—

- 神山 裕香 戦後日本の生活改善運動にみるジェンダーの諸相と近代
—愛媛県の事例から—
- 工藤 彩那 カレン族のコーヒー栽培とビジネス
—タイにおける山地民族の同化と生活の変化—
- 佐竹 風香 ファストファッションと女性雇用
—バングラデシュの縫製産業にみる貧困とジェンダーの相互作用—
- 柴田 有紗 カンボジア農村部における教育の貧困
—国家政策と開発支援に残された課題—
- 平 詩織 韓国の農村開発とセマウル運動
—国家主導による精神運動から開発援助へ—
- 武藤 成美 「コーヒー新興国」ラオスにおけるフェアトレード
—越境する市場交換・支援の射程と限界—
- 緩詰 美玖 スリランカの女性労働
—内戦・津波復興過程におけるインフォーマル部門の役割—
- 本田 陽子 カンボジア農村における貧困とジェンダー規範
—教育・性・生計維持の視点から—

志村 三代子ゼミ

- 高橋 幸子 映画『トゥルーマン・ショー』考察
—メディア、視覚構造、曖昧になる虚構と現実—
- 石原 拓実 オカルトホラーの復権作『死霊館』の分析とこれからのホラー映画
- 上岡 萌夏 『愛のむきだし』論
- 及川 珠緒 『シザーハンズ』から見るティム・バートン
- 岡本 雄 ギレルモ・デル・トロのモンスター論
- 笹本明日美 『もののけ姫』を聴く
- 関 真弥 『ユダヤ人ジュース』におけるユダヤ人の表象と迫害
- 田口 綾花 震災を軸に見る『シン・ゴジラ』
- 徳利 雅英 『風の谷のナウシカ』、『紅の豚』、『風立ちぬ』から見る宮崎駿の「飛行」と「戦争」への想い
- 根橋 萌衣 『となりのトトロ』と『魔女の宅急便』から見るジブリ映画内の女性性
- 本村 優紀 2012年公開「白雪姫三部作」における小人分析

中條 健志ゼミ

- 土井優華里 日本における黒人差別意識
—BLM運動に関するアンケート調査の分析—
- 神谷 真帆 在日ブラジル人によるエスニック・ビジネス事業所の現状と従事者の就労について
—愛知県豊橋市を事例に—
- 新堂 玲奈 日本における外国籍児童生徒の高校中途退学率が高いのはなぜか：学習支援に着目して
- 高山 彩香 日本におけるフィリピン人介護福祉士の現状
—受け入れ政策の妥当性を考える—
- 萩原 佑斗 在日ブラジル人の生活の質について
—自営業者から見る労働環境の改善—
- 村山 葵 地方都市における移民外国人と教会の関係と役割：富山県富山市での教会と信者に対するインタビュー調査を通して
- 目黒日菜多 フランスの移民問題と統合政策
—シャルリ・エブド襲撃事件にかんする新聞報道から考える—

鈴木 杏実 日系ブラジル人の子どもの高等教育への進学率
—低進学率が続く要因と背景

野村 佳世ゼミ

青木 美月 葛藤する2つのアイデンティティ
—「古いドイツ人」とトルコ人労働者—
有賀 彩希 アメリカにおける人種差別の背景と課題から
みる多文化共生への可能性
遠藤あんり ハリウッドにおける黒人差別
—映画からみる黒人の地位と制限—
王 詩 豪 日本における外国人労働者
—技能実習生と外国人留学生労働問題—
加治 愛花 インターセクショナリティの有効性
—フェミニズムの歴史と現代の社会運動から
学ぶ「差別のない社会」実現に必要な考え方—
河原 真湖 多言語・多文化国家ベルギーからみる多文化
社会のあり方
小泉 健 日本の外国人受け入れと多文化共生社会実現
への道
—自治体・NPOの草の根活動を参考に—
櫻田 真夢 美白文化と化粧品企業について
—ファノン『黒い皮膚・白い仮面』から見る
差別—
杉浦はるか イギリスの移民政策と移民への社会保障制度
の変遷
田中 美穂 日本における「外部者」の受容
—第二次世界大戦中のユダヤ人の逃避行を
通して—
土田 拳太 オランダにおける多文化共生社会の実現
—統合へ向かう政府と多文化主義存続を
目指す地方自治体—
李 博 聞 アイデンティティ・ポリティクスが生んだア
メリカ社会の分断から克服の道へ

邊 英浩ゼミ

金敬卓김경탁 「慰安婦」問題
竹内 佑哉 韓国の歴史文化からみる服飾変遷
諏訪 媛香 徴用工問題
林 日向子 韓国の教育制度と社会格差
古川 美咲 日韓の美意識比較
—「かわいい」と「きれい」
楊 凱 ドンキーコングからダークソウル

水野 光朗ゼミ

渡邊 明斗 環境と音について
大槻 哲也 古代ギリシャの選挙制度
大橋 魁斗 郡内地方におけるフィットネスについて
片山 駿平 ヒップホップの文化と歴史
引田 翔真 クルマと社会
道野 優花 スペイン語の多様性について
森江 日雅 新新宗教から考察する現代人の心性と新宗教
の変化

謝 黎・山本 芳美ゼミ

窪田 愛穂 日本社会における学校制服に関する一考察
蛇名 璃澄 女性誌にみるダイエットの低年齢化における
母親世代の影響
—2000年代の『CanCam』の事例を通して—
川村 瑚々 男性化粧の変遷とこれから
—メディアによる表現と社会的受容—
田中日向子 アイドルとファンの関係性に関する一考察
—アイドルストーカーを事例として—
飯島 実紅 中学生が抱くダイエットのイメージ
—雑誌「nicola」の事例を通じて—
池田 果帆 日本社会における孤独死イメージの変遷
—1990年代以降の『朝日新聞』分析から—
遠藤 夏樹 墓石の広まりと石材店の関係性について
—明治から昭和にかけての山梨県を中心に—
奥村 真衣 日中社会における女性の身体的美意識に関す
る一考察—19世紀後半から20世紀初頭の身
装と乳房の関係性を事例に
黒部 南 ジャニーズファンの思考と行動
—ファン・コミュニティの生態—
佐々木二葉 女性の喫煙におけるジェンダー規範
—『煙草文献総覧 和書之部』から読み取る—
佐藤 夢空 日本社会の少子化対策にみる行政の影響
—高校のライフプランニング教育を事例と
して—
党 浩 亮 「文化資本」と「文化資産」の視点からみる
文化遺産の開発と活用
—世界遺産「平城宮跡」を事例として—
古見波美香 日本の職業文化からみる彫り物へのまなざし
水野 凜 日本社会における美容脱毛のブームに関する
考察
—脱毛サロンの事例から見るニーズの変化—
山本 蓮 日本における美白意識の変遷

国際教育学科

青山郁子・岐部智恵子ゼミ

石澤 颯大 コロナ禍を経験した大学生のオンライン授業
の継続希望
—大学生のテクノロジーに対する親和性に
着目して—
鶴殿 広平 コロナ禍のストレスに対する児童のレジリエ
ンスと環境要因との関連
—親子データに基づく環境要因の検証—

工藤ひかる 運動・自然遊び経験がもたらす学童期の自己
効力感と向社会性
—親子ペアデータをを用いた分析—
鈴木 二葉 The Effect of Gender Identity on Career
Decision-Making Among Japanese Youths from
the Intersectionality Perspectives
西村 遥 児童期における外国人へのステレオタイプ萌
芽の探索的研究
—学年と性差、外国への関心の有無による差
から生じる違いについて—
村瀬 仁実 Trends in Pre-Service Teacher Education in
SAARC Countries: A Content Analysis of Two
Educational Databases from 2017 to 2021

木下 慎ゼミ

- 月岡 昂 幼少期における自然体験の重要性
ー原体験としての自然体験がもたらす意味とはー
- 大森 快人 勝者がおごることは悪なのか？
ー日本における能力主義の考察を通じてー
- 城田 勇優 臨床心理学的視点から捉えたメンヘラの歴史と展望
ーメンヘラと境界性人格障害の関連性についての考察ー
- 安井 新 持続可能な公立教員の働き方とは
吉岡 るり これからの社会につながる ICT を活用した学びとは
ー協働の道具としての ICTー

佐々木 南実ゼミ

- 荒井 結子 サステイナブル給食への挑戦
伊東 咲紀 子どもの自然体験を重要視した教育について
ーデンマークの児童館での活動を振り返ってー
- 田上 岳人 国際バカロレアから得るキャリア教育への示唆
- 田中 紅羽 「特別の教科 道徳」の目標と指導の実際
ー公立小学校での実践を例としてー
- 永山 竜成 現代社会における部活動
本間萌萌花 幼児の第二言語習得におけるごっこ遊びを利用した教材開発

Nordström, Karl Johan ゼミ

- 勝俣 有香 教師は生徒の失敗とどのように向き合っていくべきか
ー日本の教育現場を取り巻く環境と生徒の失敗の相互作用についてー
- 神山 美月 日本における スタジアムビジネスの可能性
ーアメリカと比較してー
- 渡邊麗桜奈 現代日本の生活様式改革構想
ー里山資本主義をはじめとした経済活動と農林業の体系改革による里山の再生ー
- 小林 葵 デジタルゲームを活用した効果的な学習

学校教育学科

新井 仁ゼミ

- 安藤 優希 数学的モデリング能力を高める授業づくりに関する研究
ーダイアグラムの教材化を通してー
- 井口 理翔 学習者の数学に対する学習観とその変容に関する研究
ー算数・数学の好き嫌いの調査に基づいてー
- 犬塚信之介 統計的探究プロセスを重視した「データの活用」領域の授業づくりに関する研究
- 久保田悠斗 算数・数学教育における ICT の活用と可能性について
- 熊本 新 円周率の教育的価値とその扱いに関する研究
斉藤 桃子 算数・数学教育における和算の価値とその教材化

- 松本 大輝 Citizenship Education in Sweden
ーCurriculum Analysis of Compulsory Educationー
- 宮澤 結 効果的な職員室づくり
ー教員のストレスを減らすためにー

原 和久ゼミ

- 植松 紗英 国内におけるインクルーシブ教育の現状と課題
ーデンマークにおける理念と実践を手掛かりに考えるー
- 佐々木彩美 近年の博物館と観光の関りについて
ー課題と可能性ー
- 下村 直輝 学校現場における ICT 機器活用
ー教育と行政に関する一考察ー
- 館岡 侑都 北欧的な幼児教育は日本で実現可能か
ー保育者の教育観と保育制度の比較考察ー
- 廣瀬あゆみ 学校と学習塾との連携は可能か
ーインタビュー調査の分析からー

茂木 秀昭ゼミ

- 家子 優紀 日本語教育の新しい可能性
ー国際バカロレアの日本語教育に着目して
- 秋葉勇之介 日本とデンマークにおける ICT 教育に関する課題の比較研究
- 伊藤 知佳 オルタナティブ教育における自律性を育む教育方法の公教育への応用に関する研究
- 関井 華 日本とデンマークにおけるワークライフバランスに関する課題の比較研究
- 針生 哲太 母語の影響を考慮した日本語教授法の実践と効果
- 三上日奈子 デンマークと日本におけるキャリア教育の比較研究

山辺 恵理子ゼミ

- 新井さくら 分かり合うということ
- 工藤明日美 この世界は誰のものか：倫理観と多様性について
- 立川 果歩 自由に生きるとは：子どもと社会と教育
- 中村 円香 〈私〉から見る生きる意味とその追求の妥当性

- 酒井隆太郎 小学校における分数の乗除の指導のあり方に関する研究
- 深澤 真帆 数学の授業の意識調査におけるテキストマイニングの有効性について
- 松本あずさ 音楽と数学の親和性に関する研究
- 宮川 寛子 大きな数を捉えるための記数法と命数法の使い分けについて

池崎 喜美恵ゼミ

- 大田 夢 子ども服専門メーカーと SPA 企業の市場調査をもとにした安全性に配慮した子ども服
- 大森うらら 防災意識を高めるための災害食の開発
ー大学生の防災に関する調査からー
- 金山くるみ 女子大学生のジェンダーレス制服に対する意識
- 鈴木 文菜 郷土料理への意識向上のための授業提案
- 高野まゆき 近年におけるウエディング文化の変遷とウエディングドレスの制作

長野 真奈	総合的な学習の時間と関連づけた草木染めの教材化
濱野 純名	コロナ禍におけるマスクへの意識と手作りマスク

市原 学ゼミ

阿古 駿樹	大学生における対人ストレスイベント分類の試み
太田 春菜	大学生と高校生の学習的自己概念の形成の違い
小林 怜央	大学生活への期待と現実のギャップ経験が大学適応に及ぼす影響
玉井 紘希	生活習慣とストレスについて
登條 裕矢	黒板色の場合における文字の色と記憶精度の差異について
樋口 拓朗	運動を行っていく上での達成動機についての因子分析（大学時代まででの運動経験者からの考察）
松島 蘭丸	大学生の学習観の特徴と構造について

内山 美恵子ゼミ

芦野 美優	富士山須走期スコリアの形態的特徴—その3—
畑 田菜	火山噴火実験を用いた富士山火山防災教育
堀口実耀子	先第四系分布地域における都市市内の地下水の特徴
八橋 龍佑	都留・大月地域における築城決定過程の地理的要因
吉田 有香	成長による防災意識の変化をもとに考察した小学生への地震教育
渡辺 茉奈	地域による小学生防災意識の比較—沿岸域と山間域の例—

岡野 恵司ゼミ

植原 一	平方剰余の相互法則
老久保 諒	最小二乗法の理論とその応用—プロレスラーの身長と体重について—
加藤 莉乃	数の幾何学～ピックに始まる格子の世界
神保 朋佳	組みひもとリンクの関係について
徳竹 玲奈	紐の結び目とライデマイスター移動における不変量との関係について
仲村 優花	連分数におけるラグランジュとガロアの定理
畠山 裕樹	ユークリッドの互除法の最大試行回数を与える Lucas set について

春日 由香ゼミ

秋山 実沙	小学校国語科授業における「ペーパサート劇」の研究—「お手紙」（アール・ローベル）を中心に—
神尾菜美子	小学校国語科書写の鑑賞と評価—書き初め指導を中心に—
川崎 智史	国家と「国語」について考える
熊澤 響	一読総合法から見る「読み方」についての考察
倉本 愛未	絵本の読み聞かせとジェンダー意識についての研究
櫻井 亮河	第五期国定教科書「アサヒ読本」の検討
白倉 康平	日常生活に生きてはたらく漢字指導の研究—視覚・聴覚・体感覚の活用を中心に—

高木 遥平	小学校国語科教科書における「一つの花」の教材的価値—平和教材は未来に残るべきか—
宮川莉果子	小学校国語科授業のユニバーサルデザイン
山口 知浩	大村はまの教育観と「聞くこと・話すこと」の指導

加藤 優ゼミ

赤塚 幸乃	フリースローシュート成功数と競技歴及び精神的不安要因について
笠井 梨奈	文化部和運動部の活動ガイドラインに関する研究—包括的ガイドラインの必要性—
杉山 遼	痩せ願望がもたらす都留文科大学生の食行動について
関原 宙希	東京オリンピック卓球混合ダブルス勝利要因について—水谷・伊藤選手と許昕・劉詩文選手の試合に着目して—
内藤 齊	コロナ禍における小学校の自然体験活動の実態と課題—山梨県内の小学校の場合—
渡辺 碧人	ソフトテニスにおけるゲーム分析—5球目攻撃の出現状況に着目して—

瓦林 亜希子ゼミ

浅樋 和輝	学級崩壊からみるチーム学校の在り方—子ども教師間の垂直関係と子どもの家庭環境から見える課題—
勝又 理乃	日本の公立小学校における児童詩教育の一般化に向けて—自己表現と共有が広がる学級へ—
工藤 優雅	経済格差による教育格差と学力格差—家庭環境による子どもの将来—
佐藤 正磨	公教育による学力格差の改善—海外の教育実践における個別学習と協働学習の重要性から—
高木 優介	人権教育としてのシティズンシップ教育—日本社会の特色に注目して—
三原 悠	「#教師のバトン」から考える教師の在り方—やりがいを見つけるためのフレネ教育—
山崎 みな	学校統廃合の意義について問い直す—小規模校における教育活動の可能性—

上原 明子ゼミ

天羽あすか	小学校英語教育における教員研修
功刀 海彩	英語を苦手とする中学生への効果的な指導
栗原 拓也	小学校英語教育における CLIL の意義
黒崎佳寿美	日本における幼児英語教育
林 真未	日本の英語教育における小中連携
峯崎 桃花	小学校英語教育におけるフォニックス指導導入の検討
渡邊 裕介	小学校英語教育における ICT の活用

佐藤 隆ゼミ

塩田菜々子	小中一貫教育の可能性と課題—二宮町の動向から考える—
-------	----------------------------

門藤 美月	石川スタンダードから考える現在の学校教育の課題
高橋梨衣奈	太田一徹の実践を通して日記の可能性を探る
徳田 健汰	先生という職業を聞いて現場の教員は何を思っているのか
原口 風音	子ども食堂から見る貧困家庭への支援策
村上 響	日本におけるジェンダー教育を検討する

清水 雅彦ゼミ

宇佐美 遥	教科の枠を超えた音楽教育
大寺 健人	音階から紐解く音楽の印象
寺師 眞音	新型コロナウイルス感染症以降の音楽指導とは
長澤 紀香	小学生の発達段階における音楽
萩田 瑠夏	心を動かす音楽
三原 可愛	音楽聴取が心身に与える影響 —さまざまな BGM に着目して—

十川 菜穂ゼミ

緒方菜々子	小学校音楽科における鑑賞教育の新しい試み —感想だけに頼らない指導方法とは—
高橋明季乃	作業時における最も効率的な BGM について
嵩原 理央	琉球音楽の歴史と発展について
塚本 万葉	小学校低学年における音感教育的アプローチ
花輪 大和	中学校吹奏楽部指導における指導者の資質はどうあるべきか
深沢 元彦	時代の流れに伴う JPOP の変化
山田まなみ	小学校音楽科の授業以外における音楽活動の意義 —学習指導要領の変遷とアンケート結果から—

竹下 勝雄ゼミ

大橋琳太郎	図画工作における著作権の取り扱いについて
奥山悠衣香	自己肯定感を育む図画工作・美術教育に関する一考察
中村龍之助	漫画表現の教育的効果の一考察
畑田 佳奈	鑑賞教育を通じた PISA 型読解力の育成について
村松奈津子	東欧諸国の児童画に見られる色彩感覚に関する一考察
森本 美紀	創造性や意欲を高める図画工作科指導についての一考察 —アウトサイダー・アートのアプローチの視点から—
吉澤 麻衣	人格形成を支援する造形活動についての一考察 —アートセラピーを活用した図画工作—

筒井 潤子ゼミ

赤羽 由紀	絵本がもつ子どもを育む力 —いわさきちひろのまなざしから考える—
大野 晃一	教育機会確保法の功績と課題
佐野 光希	「クレヨンしんちゃん」から学ぶ育児論 —親として大切なことは何か—
清水 咲良	ケアをする子どもの権利と未来を守るために —日本におけるヤングケアラーと支援のあり方について—

下村みふゆ	“しつけのつもりだった”をなくすために —児童虐待としつけの違いについて考察する—
仙波 珠里	不登校児の居場所
中込 将大	「仮面ライダー」から見るヒーローの教育的影響力
横澤 芽生	自己肯定感を育むことについて考える —多様化する社会を生きるために—

堤 英俊ゼミ

浦崎 晃次	知的障害のある子どものことばの学習 —生活に根ざした対話を通して—
遠藤菜々美	学習者の生活に根ざす日本語教育についての研究
小川 美咲	“KY” なつぶやきからはじまる学級づくり
軽部 百夏	「自分づくり」の探究学習 —児童の気づきを糸口として—
中野 志保	教師の実践における「ふりかえり」の研究
丸田 紫乃	「美しい顔」を支援するということ —教育学の観点から—
三橋 英夢	子どもの自由な発想を育む学びと実践づくり

鶴田 清司ゼミ

石澤 里菜	数学科において未来を生きる力を養うための授業づくり
大竹 優奈	道徳教育の視点から考える、いじめに効果的な教育実践について
大場 美輝	「いい教師」とは —児童、保護者、教師とのズレ—
小野 育実	多様性を尊重したアクティブラーニングの在り方 —誰もが主役になれる学びを目指して—
中込 蒼真	ドラマチックな授業を作る国語教材研究
宮下 夕奈	スクールカーストが及ぼす影響と教師の在り方
渡邊 空美	「学び合い」における自尊感情の形成

寺川 宏之ゼミ

小林 明美	シムソンの定理について
斎藤 もも	ブラーマグプタの定理について
櫻山 奈々	トレミーの定理について
能登谷理玖	オリガミクスについて

鳥原 正敏ゼミ

伊藤みゆき	予測困難な時代を生きる力を育む学校教育 —都留文科大学の学びを通して—
岡田 航輝	環境がつくる豊かな学び合いに関する一考察 —図画工作の活動を足場として—
齋藤 乃恵	図画工作の必要性に関する一考察 —美術教育で育むことができる力—
田中涼太郎	これからの時代で求められる学校教育のありかたに関する一考察 —自分らしくやり遂げるためのプロセスの重要性について—
野口 夏摘	図画工作の可能性と評価に関する一考察 —日本人の集団的思考から考える—
松本 恭幸	これからの時代が求める図画工作に関する一考察

吉岡 健太 身体による表現からみる美術教育の可能性に関する一考察

中川 佳子ゼミ

阿部 春菜 物語の挿絵が与える心理的效果
石井 里奈 物語の挿絵が与える心理的效果
小材 紗喜 ファン心理について
中村 太一 大学生の食生活の偏りについての検討
橋本 夏帆 大学生における感情表出の調整について
南 拓海 通塾と中学校の指導に対する満足感の関係
山本 和馬 恐怖体験がストレス反応と感情にもたらす心理的效果
ーホラー映画の鑑賞によってー

西本 勝美ゼミ

江尻 大輝 誰もが誇れる職業生活へ
ー高校の社会的機能に着目してー
菅野 雄太 誰も苦しまない社会へ
ー学校教育における性のステレオタイプとその解消に向けてー
菅野 由佳 親と子の生きづらさ解消に向けて
ー地域の居場所づくりに必要なこととはー
木戸 直輝 理想のコミュニケーションツールとは
ー現代の課題から今後の SNS の方向性を探るー
小玉 杏虹 職員室の活気が子どもたちを笑顔に
ー#教師のボタンが浮かび上がらせたものー
只野 未佳 地域で生きる姿勢をどう育てるか
ー逃げ地図づくりを活かしてー
橋口 有希 活気ある農村へ
ー地域住民で誇りと生きがいをつくるー
水谷 芽以 みずから居場所を見つけていける社会へ
ー“居場所づくり”は本来の居場所になるのかー

平野 耕一ゼミ

秋山 未来 中学校理科の物理領域における「問い」に関する教科書分析
小久江優真 ジャイロ効果を用いて船の揺れを低減するための条件について
坂上 心汰 地球の上に置かれた長大な棒の上における宇宙までの道のりについての思考実験
佐藤 友樹 金属に通電した場合の、さびの進行への影響について

廣田 健ゼミ

安西 礼菜 体験活動を通じた「主体的・対話的で深い学び」に向けた小学校教育における授業実践
ー「縄文時代のスーパーフードどんぐりクッキー」から考えてー
尾崎紘太郎 ICT 化の推進が教育に与える影響についての考察
ー岡山県の私立 S 高校の事例分析を通してー
高橋穂乃果 戦争体験者が減少していく中での平和教育の在り方について
ー沖縄戦を題材としてー
田中 莉彩 餃子で知る異文化理解・国際理解

長野 知佳 いじめの課題と対策の在り方
ーストレスの少ない教室環境の整備の視点からー
新田紗也佳 映画から見る多様性
ージェンダー・セクシュアリティと特別な教育的ニーズの視点からー
平野 秀典 教師のインタビューから見る働き方改革の課題について
ー教師の多忙感に注目してー
藤野 桃果 毛呂山町の桂木ゆずから考える地域学習
ー茨城県長倉小学校の実践を手がかりにしてー

藤本 恵ゼミ

片田 実来 救いとしての『西の魔女が死んだ』
ー居場所の無い子どもたちー
齊藤 絢 有川浩『塩の町』から始まる「大人向けライトノベル」
土屋 元紀 星新一ショートショート論
ー文明の欠陥を問い直すー
根本 美風 <現代幼年童話>の描くジェンダー
ー石井睦美「わたしはすみれ」シリーズを中心にー

別宮 有紀子ゼミ

荒木 美乃 サツキの葉における量子収率の季節変化
ーサツキはなぜ冬に紅葉するのかー
勝野 聖夜 暖温带・亜熱帯植物の地上部と地下部の関係性
ー光合成・蒸散の日中変動が根の呼吸に与える影響ー
川尻 佳奈 蒸散速度の多様性に着目した教材研究
河野さくら 植物における気孔の多様性
ー生物多様性理解のための教材研究ー
濱口 駿作 暖温带・亜熱帯植物の地上部と地下部の関係性
ー光合成・蒸散の日中変動が根の呼吸に与える影響ー
村田 芳毅 「CO₂と植物の成長」を学ぶための教材開発
ー温暖化を多角的な視点で考えるためにー

邊見 信ゼミ

今井 碧 小学校教師の「学力観」を考える
ー習熟度別指導を通してー
亀田 桃花 学校現場におけるユニバーサルデザインの有効性
島 陽向 『不登校新聞』から見る不登校児の心の動き
高木 舜斗 小学校段階における学習意欲の低下についての考察
ー子どもの生活から学びへの転換ー
徳永 夏穂 いじめの発生機序から考えるこれからの教育指導
森井 穂乃 大学生の家族に対する居場所感のゆらぎ

水口 潔ゼミ

伊藤 夏花 コミュニケーション、コミュニケーション能力、コミュニケーションスキルの意識の研究
ー都留文科大学大学生のスポーツ経験に着目してー

越智 美円	体罰の認識に関する研究 ー文献調査からー
笠川 七海	小学校体育に対する好意的感情の要因の研究 ー都留文科大学教養学部学校教育学科の学生を対象としてー
中嶋 楓子	ストレスコーピングについての研究ー大学生生活での運動経験に着目してー

武蔵由佳・熊谷圭二郎ゼミ

五十嵐有彩	コロナ禍における学級経営の変化について
加賀美 嶺	コロナ禍における大学生の友人関係について
今野 愛美	あがりかパフォーマンスに与える影響と不安の強度および対処法
關本 愛	大学生の依存性の適応的観点からの検討
中村みなみ	出生順位と性格
中村 友香	自伝的記憶が教職志望意識に与える影響
中山 美奈	家庭環境がゲーム依存に及ぼす影響
西野 創太	不登校に関する諸研究 ーインタビュー調査から考える原因と個別対応ー

柳 宏ゼミ

磯部晃太郎	陸上競技大会に向けてピーキング研究 ー跳躍選手 K・I の場合ー
市川 未侑	運動が記憶力と作業量に及ぼす影響について ー運動強度、運動時間に着目してー

北村 風音	女子バレーボール競技成績と攻撃力・レシーブ力の関係について ー TOKYO2020 の場合ー
小堀 瑠夏	スポーツ経験が社会人スキル形成に及ぼす影響について ーゆとり世代と脱ゆとり世代との比較ー
佐藤 悠斗	リレールール変更が戦略とタイムに及ぼす影響についての研究 ー小学生 4 × 100 m R の場合ー
菅原 柚	女子バレーボール競技成績と攻撃力・レシーブ力の関係について ー TOKYO2020 の場合ー
古川 汐里	スポーツ経験が自己肯定感へ与える影響について

山森 美穂ゼミ

近藤 翔	当事者意識を醸成する小学校環境教育 ーゼロカーボンシティ宣言都市愛知県半田市を例としてー
田口 皓大	無色透明飲料の作成実験と理科教材化
波頭 祐希	クジャク石を素材とする中学校理科化学分野の学習 ーひとつの素材から多くの学びにつなげてー
廣田 友樹	小学校理科における実験誤差の考え方
水谷 哲平	児童の理科に対する興味を引き出す実験 ー理科が苦手な小学校教員の現状を踏まえてー

地域社会学科

国際経済論 春日 尚雄ゼミ

今村 功輔	ASEAN の都市化の特徴 ージャカルタの事例ー
内田 賢	東日本大震災と災害弱者の防災・復興への参画ー「女性防災リーダー」の事例から
加藤 雄崇	戦後日本型 ODA (～ 1990 年代) の特徴とその影響
櫻井 隼	「一帯一路」構想の進展と展望 ー現況からみる構想の目指す未来とはー
島村 純怜	SDGs 変遷と日本における取り組み
中川 智吉	「中所得国の罠」問題 ー韓国・中国・タイを事例にー
古屋 英	1997 年アジア通貨危機におけるマレーシアの対応 ーマハティール首相の果たした役割ー
松本健太郎	グラミン銀行からソーシャル・ビジネスへの発展 ーバングラデシュでの成功ー
三家 伶来	中国のゲートウェイとしての香港 ーその特殊な金融制度による価値ー

地域経済論 両角 政彦ゼミ

上田ひかり	ユニバーサルツーリズムの促進とまちづくり ー兵庫県神戸市を事例にー
河西 彩夏	山梨県南アルプス市における人口の社会増加に向けてー移住者を焦点にー

風間 悠花	中山間地域における農福連携がもたらす地域コミュニティへの影響 ー山梨県都留市を事例にー
酒井明日菜	資源循環型農業システムを活用した地域振興 ー島根県仁多郡奥出雲町を事例にー
朱 淋	石炭資源型地域経済の取組みと発展方向 ー中国山西省を事例にー
高島 優	伝統野菜のブランド化と新たな展開 ー「大和野菜」を事例にー
高瀬 奈摘	農業集落における社会経済機能低下の対策 ー房州びわを活用した 6 次産業化を事例にー
田畑 勇也	立地適正化計画における誘導区域外の問題 ー札幌市を事例とした都市機能へのアクセシビリティと住民自治ー
村野洸太郎	観光地域における空き家再生の可能性 ー尾道斜面地を事例にー
森元 友貴	アニメツーリズム振興による地域観光の活性化 ー沼津市「ラブライブ！サンシャイン！！」を事例にー
山下 直哉	地域情報化による地域ブランド化 ー北海道神恵内村を事例にー
山田 昂宏	宿泊施設における観光客を対象とした災害対策 ー鳥取県倉吉市を事例にー

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

大橋 佑生	日本の育児支援制度と人口減少社会の今後
荻原香奈美	農業主体のソーラーシェアリングにおける課題と可能性
河合 竜誠	森林認証が地域の林業・木材製造業に与える影響 ー静岡県浜松市を事例にー

橘田 海斗	高齢ぶどう農家の農地経営における雇用の動向と今後 —山梨県笛吹市一宮町の高齢ぶどう農家を事例に—
近藤 敦	棚田オーナー制度の展開と課題 —千葉県鴨川市を事例に—
新井谷巨輝	農業用ドローンの現状と課題
平出 諒真	学校統廃合が地域に与える影響
村井 勇太	山梨県産野菜の域外流通の試み —北杜市・FARMERS AGENCY の事例から—

企業経営論 佐脇 英志ゼミ

岡部 楓生	現在の社会から求められる学生の能力とキャリア教育の課題
粥川 慧	社会の関心の変化から見る日本の地域ブランディング —論文・新聞記事データベースを活用した分析の試み—
菊岡 怜司	山梨の空き家問題とその改善における可能性
後藤 靖博	リーダーシップ論の展開と VUCA の時代 —コロナ禍の経営者を例に—
小宮山雄斗	若者に対するモチベーション・マネジメントについての考察
高瀬 晴喜	集中型多角化戦略を行う異業種企業の農業参入における競争優位性獲得についての研究
丹野 皓允	官民連携にみる地方創生の可能性 —小菅村とエアロネクスト事業を事例に—
成見 航希	ファストファッション業界が直面する危機とその対処方法の考察
橋本 麻央	ファンダムからみる集客の可能性とその効果的戦略
藤本 桐葉	日本のフェアトレードタウン運動の意義と今後 —世田谷フェアトレードタウン運動を事例に—
渡邊 樹	小菅村における買い物難民支援のビジネスとしての可能性 —エアロネクスト事業を事例に—

公共政策論 高橋 洋ゼミ

阿久沢紗子	空き家問題の解決策としての空き家バンク —成功事例と失敗事例からの考察—
藤田 哲平	第2次安倍政権はどうして憲政史上最長たりえたのか —官邸・政権内の相互作用から—
荒井 伊織	日本銀行の金融政策における独立性の検討 —量的金融緩和政策を巡るアイデアの対立を中心に—
坂上 大河	在留資格「特定技能」の創設は移民政策の解禁か —「3つのI」による政策過程の検証を中心に—
飯田 珠紀	教育格差是正のための就学前教育政策 —諸外国で行われた政策分析を元に—
佐々木海羽	道州制に関する議論の歴史的展開 —府県制度との比較の観点から—
永田 智哉	ふるさと納税制度は地域活性化に寄与しているのか？ —各自治体の取り組みを基に検証—

自治体経営論 鈴木 健大ゼミ

加藤 悠祐	リニア中間駅の機能に関する考察 —リニア岐阜県駅における観光の玄関口としての可能性—
小林 史佳	訪日外国人観光客増加に向けた酒蔵ツーリズムの可能性について —新潟県佐渡市をフィールドに—
坂口 実夏	地方自治体における孤育で支援に向けたアプリ活用について
鈴木 舞夢	心の復興に向けた被災者支援 —園芸療法による心のケアの可能性について—
竹花 龍樹	独居高齢者の孤独問題解決に向けたeスポーツによる世代間交流の可能性
田中 美宇	日本における CSA（地域支援型農業）の普及の可能性について
友淵 喬昭	中学校における生きづらさを抱える生徒の早期発見に向けて —校内居場所カフェの導入と役割—
野口 裕太	アートを活用した障がい者の社会参加促進
牧野 諒太	NPO による地域に根ざしたキャリア教育の必要性 —教員の負担軽減とキャリア教育の発展に向けて—
室伏 真帆	地方に住む悩みを抱えた若年女性支援のためのアウトリーチ実施団体間の連携
渡邊 海斗	道志村をフィールドとした買い物弱者対策の研究

憲法 樋口 雄人ゼミ

栗原 貴則	道州制の検討
高根 綾花	職場・学校における身なりの規制
谷口 海人	地方自治体の財政危機 —その要因と克服のための方策—
中島華奈美	多様な働き方を選択できる社会への構想
萩谷 公輝	首相の靖国神社参拝問題
西村 樹紀	少年法改正 —被害者・加害者・社会の捉え方—

国際政治学 峯田 史郎ゼミ

伊藤 優毅	テロに対する軍事的行動の有効性 —国際法と事例からみた対応の限界—
井上 由梨	SDGs における海洋生物資源保護 —南極のメロ類保護からの考察—
上甲のの花	台湾の抱える自立と繁栄のジレンマの変容： 馬英九政権における対中経済政策とヒマワリ学生運動
新谷明日香	拡大核抑止の歴史的展開：冷戦後の日米安全保障観
高田 渚	武器移転における相互依存関係 —サウジアラビアとアメリカを事例に—
野田 拓海	サイバー空間の勢力図：2010 年以降の米中関係に着目して
秦 和也	化学兵器に関する「国際レジームの重層性」と「規範の遵守」の考察
藤原成太郎	人の移動と社会変容：2018 年入管法改正が外国人労働者と日本社会に与える影響
三村 真紀	東南アジアにおける人身取引：児童労働を中心に

- 矢藤 海聖 江戸時代末期日本の外交評価
—欧米列強の植民地主義政策とその幕府の
対応を元に—
- 湯元 偉月 アメリカ大統領の政策決定に対するネオコン
の影響：ジョージ・W・ブッシュ政権下のイ
ラク戦争を事例に

環境社会学 神長 唯ゼミ

- 島田 千聡 石川県における観光公害と持続可能な観光
清水 美希 「日本型フードバンク」の確立に向けた静岡
県の取組み
- 竹縄 優香 都留市宝鉱山における鉱毒被害の継承問題
早坂 晴生 コンビニ食品ロス対策におけるオーナーと本
部の関係性
- 三井 嘉乃 宝鉱山がもたらす地域住民への影響
—開発の光と影—
- 横山 裕樹 藤前干潟におけるプラスチックごみ問題
渡邊 俊一 山梨県の富士山レンジャーの果たす役割

環境法 三好 規正ゼミ

- 安倍 莉那 我が国の森林制度と課題
～森との共存を目指して～
- 伊藤 葵 住みやすいまちづくりについて
—景観と自然—
- 猪原丞一郎 桂川の環境問題と地域活性化
漆畑 蓮 渡良瀬遊水地における変遷と環境形成・保全
について
- 梶本 詞音 生物多様性とグリーンインフラ
菊井 文貴 生物多様性から考える人類と他の生物の共生
について
- 久津間秀幸 技術革新を中心とした日本の気候変動対策の
研究
- 佐藤 優花 福島第一原発事故の放射能土壌汚染から学ん
だ課題をもとに
- 萱 豪 銘 廃プラスチックの越境移動問題—日中にお
ける廃棄物の法的規制と示唆
- 馬場 将矢 再生可能エネルギーと地域
武藤 正宗 日本における二酸化炭素排出量削減に向けた
政策と課題
- 山本 詩音 わが国におけるプラスチックごみ問題と対策

地域社会論 田中 里美ゼミ

- 赤塚由紀葉 移住者の社会的孤立感を防ぐ支援についての
—考察—
- 小野寺 想 —小菅村でおこなう移住者支援—
地域包括ケアシステム構築に向けた民生委員
の役割
- 白川 芽依 長期化するひきこもりの解決に向けて
—関係諸機関の役割と連携から考える—
- 杉山みなみ 地域社会における在留外国人支援について
—地域日本語教室の現状と課題—
- 田中 里奈 若者のSNS使用動機と精神的健康状態の相
関関係について
- 中村 里緒 サードプレイスに関する—考察—
野武このは 家事の有償化について
星野ひかる 日本の非正規雇用の現状と課題
—同一労働同一賃金から考える—
- 森 宏太 児童虐待予防策としてのホームスタート
—直接支援による効果に関する—考察—

- 矢野 叶華 保育の質の向上のために家庭的保育が果たす
役割
- 若畑 歩佳 ひとり親家庭の貧困と子どもの自己肯定感

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

- 大竹 由芽 地方におけるデマンド交通の現状と課題
—福島県喜多方市を事例に—
- 佐野 巨人 LRTの導入に関する海外事例の文献的研究
鈴木 敦大 津波避難シェルターの開発の実態と津波にお
ける効果の可能性
- 武智 康介 日本とスイスにおける住民投票制度の比較研究
—公共施設建設を事例に—
- 仲川 郁美 建築整備と運営における図書館評価のポイン
トと傾向について
- 福元 健之 輸送密度からみる日本の鉄道の現状

環境教育 高田 研ゼミ

- 有井 大輔 校歌作成の意図
—徳島県神山町の小中学校の事例から—
- 岡本 一真 太陽光パネルとその周辺地域の景観問題
—山梨県北杜市の事例から—
- 勝沼宗一郎 ユネスコエコパークの意義と課題
—南アルプスと甲武信の事例から—
- 黒澤 百子 日本の「化け猫」が表象するもの
桑子 旬平 電子書籍普及の現状と課題
—漫画の読書動向から—
- 塩谷 龍哉 大河ドラマで持続的な観光需要を生み出すた
めには
—兵庫県姫路市「軍師官兵衛」を事例に—
- 高橋 諒 傾斜地農業における6次産業化の現状と展望
—山形県南陽市を事例に—
- 時田 俊輔 安楽死・尊厳死の法制化
—日本と諸外国の比較から—
- 西野 亜依 観光地における「観光公害」の課題と取り組み
—富士吉田市新倉富士浅間神社を事例に—
- 長谷尾有美 アパレル産業の環境問題への取り組みと、
ファッションへの大学生の消費者意識
- 吉武 聖真 ICT教育の現状と課題
—佐賀県の高등학교の事例から—

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 足立 駿平 コミュニケーションをめぐる規範の変遷
～""話す／聞く""をテーマとしたベストセ
ラーの分析から～
- 坂 泉樹 キャリア継続を支える制度の視点
—「ワークライフバランス職場表彰」選考基
準の検討から—
- 佐藤 華音 ジェンダー／セクシュアリティ問題の解決に
向けた教職員研修の意義
—国立女性教育会館の事例に着目して—
- 島 啓太 知はどのようにシティズンシップを育むのか
—地域住民による人文社会系活動を事例に
して—
- 嶋津 千尋 思春期の子どもをめぐる家庭教育の課題
—Yahoo!知恵袋の分析から—
- 城 万葉実 日本の放課後事業のあり方と伝統的家族観と
の関係性

- 鈴木 紫陽 「男らしさ」への抵抗はどのように扱われるのか
—「ジェンダーレス男子」をめぐる雑誌記事の分析を通して—
- 高島 大暖 なぜ少子化対策はうまくいかないのか
—若年層の価値観、ライフスタイルを中心に—
- 竹内 唯 若者の不安と希望
～ぼっち系 YouTube チャンネル「パーカー／大学生の日常」の考察を通して～
- 田村 一稀 知識構成型ジグソー法の現代的意義
～高等学校公民科指導を中心に～
- 中山 龍 子どものゲーム遊び研究における遊び像

社会科教育 西尾 理ゼミ

- 浅野 友香 ふるさと教育の実践における地域で活躍する人材育成の役割
—岐阜県高等学校の普通科に着目して—
- 安達 康晴 モノ教材を用いた社会科授業の構想
～佐渡金銀山に見る近世の日本社会を通して～
- 小尾 英廣 歴史総合における世界史教育のあり方
—近世を取り扱う意義—
- 柿 瑞穂 日韓共通歴史教材の存在意義と今後の課題
- 佐藤香奈子 河原和之による学力差のない社会科授業
——中学校地理的分野における社会認識形成と教材・教具の視点に着目して——
- 鈴木 智弓 歴史意識を育む中学校歴史教育の在り方と授業実践
- 辻 千尋 地理教育における暗記科目からの脱却と地理の実用性
～ケッペンの気候区分を手がかりに～
- 星野 佑芽 中学校社会科の地理の役割
—ケッペンの気候区分を学ぶ意味—
- 望月 茜 TRPG を用いた役割体験学習の探究

地域史 鈴木 哲雄ゼミ

- 井藤 颯人 中世社会における肉食文化と動物観
- 大川 遥史 「蹴鞠口伝集」と中世蹴鞠文化
- 齊木 倭 引馬城から浜松城へ
—浜松城発掘調査の成果から—
- 濱中 紗句 蒙古襲来と捕虜
- 三浦 誠也 富士山の近代化
—パークス夫人の登頂と女人禁制—
- 森田 佳希 『醒睡笑』から読み解く落語のおかしみ
- 安原まどか 『曾我物語』にみる箱根権現と伊豆山権現
- 山下 友弘 明治十年代のコレラ流行における国家と民衆



文学専攻科教育学専攻

佐藤 隆教授

大畑 済 主体的・対話的な深い学びとしての算数教育

大学院文学研究科

○国文学専攻

寺門 日出男教授

大塚 祐奈 韓愈の社会詩について

○社会学地域社会研究専攻

鈴木 哲雄教授

高橋 将貴 社会史の方法に学ぶ歴史教育の実践 ～中世の子どもの題材に～

○英語英米文学専攻

竹島 達也教授

井上 陽裕 Queer Futurity beyond Heteronormative Time : A Study of Tony Kushner's *Angels in America*

加藤 めぐみ教授

坂倉 拓実 A Corpus-Based Analysis of the Narration in *Dubliners*

Olagboyega, Kolawole Waziri 教授

Chan Cheuk Ling
The Prospects of Mandarin as a World's Lingua Franca

Francine Chloe Ramirez
A Case Study on the Anxieties of EFL Learners in Japan

Evans, Hywel 教授

苗 迪 Chinese Verbal Morphology and the Evolution of Language

○比較文化専攻

伊香 俊哉教授

白 鎮慶 日中戦争期華北における新民会の展開と衰退

○臨床教育実践学専攻

廣田 健教授

高木あか音 偽りの主体化を乗り越える教育の在り方

新型コロナ禍における大学の対応(連載)

令和2年(2020年)2月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス(COVID-19)の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、3月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの(スペイン風邪では2年~3年)であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

新型コロナ禍における留学支援

国際交流センター長 茂木 秀 昭



平成31(令和元)年度

2019年4月から国際交流センター長に着任しましたが、既にその3ヶ月前にはカリフォルニア大学から提携終了の連絡がありました。4月中にカリフォルニア大学の留学担当者と話し合いを持ちましたが、組織としての決定が既になされていたこともあり、方針が変わることはなく、波乱含みのスタートとなりました。

まず学内の留学生用のプログラムの整備をし、日本語(JAST)プログラムと英文、国文、比文の三学科合同部会からのJSP(Japan Studies Program)と国際教育学科の留学生プログラムを統合して、新たにTISP(Tsuru International Student Program)として、海外からの留学生が英語で提供されている科目を学科の枠を越えて履修できるように再編成しました。

6月にはワシントンD.C.で開催された世界最大の国際教育交流組織であるNAFSA: Association of International Educatorsの年次大会に参加して、カリフォルニア大学を含め、全ての提携大学の留学担当者にTISPのパンフレットも渡し、また、ポートランド大学等いくつかの新たな大学とも将来の提携に向けた話し合いをしました。9月にはヘルシンキで開催された欧州の国際教育交流団体であるEAIE(European

Association for International Education)の年次大会に参加し、ヘルシンキ大学を始め、チェコやカーディフの大学とも個別に話し合いが持て、今後の提携先拡大の可能性も見えてきた矢先の新型コロナの感染の広がりでした。

翌2020年2月下旬、韓国への留学生を送り出して以降、実質的に交換留学は停止状態になり、3月には海外の留学先から学生が帰国し始めました。特に英語圏の提携先大学では、春学期はほぼ全てオンライン授業となり、本学も同様の対応となりました。



元国務長官のオルブライト氏やパウエル氏も参加したNAFSAの年次大会

令和2年度

4月には政府から全国への緊急事態宣言が出され、本学も学生の命と健康を第一に考えて、国際交流センターとして「留学に関する安全ガイドライン」を作成し、5月に大学の方針として正式に採用されました。公立大学としてあくまで政府の方針に準拠して、外務省の感染危険情報レベル2（不要不急の渡航中止）以上の国への留学は中止となりました。その時点で、アメリカでは、日本もLevel 3（警告；不要不急の渡航中止）に該当していました。スウェーデンでも4月以降多くの人々が亡くなったと後に現地の留学コーディネーターから聞かされました。

そうした中でも、例年7月頃から翌年の交換留学生の選抜がおこなわれるため、中止になる可能性も認識してもらった上で、アジア圏や英語圏などの面接は全てオンラインでおこないました。8月になって、大学としての留学派遣は中止したものの、個人では留学できるのではないかという議論が起きたため、オンラインやメール等で議論しました。その結果、大学の交換留学プログラムを利用する以上、個人の資格で参加するという理屈が成り立たず、政府の渡航自粛勧告にもかかわらず大学のプログラムで渡航を許可したとなると大学の社会的責任も問われることになり、コロナに感染した場合の後遺症に関するデータも出始め、健康に深刻な問題が生じることが懸念されたため、個人での留学も見送られました。

後期になっても依然としてコロナ禍の収束が見通せない状況が続きましたが、提携先大学の授業をオンラインで受講し単位履修を認めてあげられないだろうかという議論になり、国際交流センターとして「海外の提携先大学とのオンライン受講と単位認定について」の原案を12月に作成し、3月にかけて審議を重ねて、最終的に承認されました。これは、交換留学の資格があり、かつ本人の事情によらずに渡航できない場合に、海外の提携大学が提供する授業をオンラインで受講し、同一学期（半期）内に提携先の10単位と本学での10単位の合計20単位を上限に認めることができる、とした内容です。時差の関係で履修が困難な海外のオンライン授業も想定される中、本来の留学の次善の策とはいえ、新たな形で海外の授業を受講し単位履修まで認められるようになったこと

は、再開への第1歩になったのではないかと思います。

結局昨年度は、センター業務としてはコロナ対応に終始し、留学は停止したままでしたが、留学に関する様々な環境整備と方針策定に追われた1年間でした。

令和3年度

令和3年度は、組織の体制強化のため、新たなスタッフや教員も国際交流センターに加わり、交換留学の再開に向けての準備、オンラインを活用した国際交流の開発、センター発の授業の整備と拡充などをおこなっています。

今年度も前期は交換留学が停止状態でしたが、一般のワクチン接種が日本でも5月頃から始まり、7月下旬から、留学に行く大学生も優先的にワクチン接種が受けられるようになりました。そうした状況の変化に対応するため、「留学に関する安全ガイドライン」も、ワクチン接種等を条件に提携先大学が受け入れる場合、同時期に本学への受け入れが条件でないケースに限り、日本でワクチン接種を済ませば留学できるように7月に改正しました。それにより、8月からカリフォルニア大学やセント・ノバート大学に留学へ行く学生も出始めましたが、日本国内では、8月のオリンピック前後に第5波のコロナ感染流行が起きてしまい、都留でも感染者が出たことなどから後期授業も当初はオンラインになり、交換留学も見送らざるを得なくなりました。

来年度の状況も未だ見通しが立たないですが、7月から12月にかけてアジア圏、欧米圏への留学生を選抜する面接をオンラインや対面で6回ほどおこないました。後期開始後、第5波も徐々に収束し、対面授業も再開しましたが、11月頃から変異株オミクロンが海外で急速に感染拡大し、日本にも第6波が到来したため未だ予断を許しません。ワクチンのブースター接種や経口薬も利用可能になりつつある中で、今後も交換留学再開に向けて準備をしていき、オンラインの活用など新たな可能性も含めて、学生の留学支援のためにできることをセンターのスタッフ、教員全員で着実にこなしていきたいと思います。

オンライン留学という新たな学びへの支援



国際交流センター特任教授
瀬尾 尚史

コロナ禍で海外渡航が困難となり、多くの学生が海外留学を諦めざるを得ない事態となってしまったが、その一方で急速に発達したのがオンライン留学という学びの形である。国際交流センターでは夏休みに合わせて、アメリカ、カナダ、スペイン、フランス、中国の大学で行われたオンライン語学研修を提案した。今回は学生が個人でプログラムに参加する形であったものの、受講後に修了証明書を提出することで、海外語学研修（2単位）として単位認定をすることや、授業料の3割をグローバル教育奨学金で援助できるように規程改正も行った。

渡航費がかからず、3週間の研修で授業料は

6万円前後のプログラムが多かったので、学生が気軽に参加できるかと期待をしたが、実際に参加した学生数は決して多いとは言えなかった。認知度アップが今後の課題だろう。ただ、受講した学生の満足度は高かったようだ。あるプログラムのZOOMを利用した修了式に私も参加させてもらったが、授業内容の充実ぶりが伺えた。

コロナ禍が終息した後も、オンライン留学という学びの形は継続することだろう。留学に興味はあっても、いきなり海外で授業を受けることに不安を感じている学生や、経済的事情から留学を諦めていた学生にとって、オンライン留学というのは新たな学びの可能性を広げてくれるものだろう。また、長期留学を目指す学生が語学力を伸ばす手段としても、利用価値は大きいだろう。国際交流センターとしては、引き続きオンライン留学への支援も行っていきたい。

オンライン日中共同授業という新しい試み



国際交流センター特任准教授
周 非

コロナ禍で国際交流が途絶えている中、国際交流センターでは2021年度後期から、オンライン日中共同授業という新しい国際交流の試みを始めました。

この授業では、本学の学生たちは中国協定校の学生たちと一緒に日中両国の文学作品について日本語で討論し、学習します。文学の話始める前に、両国の学生たちがそれぞれ自分の国のホットな話題などについて発表してくれます。毎回、学生たちの活発な討論、熱心な勉強ぶりを見て、この授業の担当者としてのやり甲斐を強く感じます。学生たちもこの授業に対して関心を持っており、半期ごとに参加者を募集

するにもかかわらず、両国とも連続応募する学生は数多くいます。

それに、この授業では、いくつかの特別企画も行ってきました。2021年1月には、日中共同国語教材・魯迅作品『故郷』発表100周年を記念し、『故郷』をめぐる日中大学生討論会を実施し、2021年6月には、『故郷』をめぐる日中両国の文学研究者・国語教員の交流会を行いました。2021年7月末には、「児童文学と戦争」というテーマで、日本の児童文学作家あまきみこの作品『あるひあるとき』をめぐるオンライン講演会・日中大学生討論会を実施しました。この三回の特別企画とも、日中両国の新聞に報道されました。

この新しい試みは、本学が時代の変化に応じて開発した新しい国際交流の形であり、今後、より多くの国から参加者を募集する、国際共修科目に発展する可能性も持っていると考えます。

コロナ禍での挑戦、アメリカ留学！



私は現在、アメリカのウィスコンシン州にある大学に留学をしています。冬には気温がマイナス 20 度を下回る日もあり都留と比べるととても寒いですが、豊かな自然に囲まれたキャンパスがとても気に入っています。私の大学では対面での授業が行われ、クラブ活動、イベント等も活発に行われており、とても充実した留学生活を送っています。

コロナ禍でのマスク生活で特に苦労しているのが授業中ディスカッションです。アメリカの大学では、日本の大学に比べると授業中の発言がより重要視されます。私の大学は比較的小規模で少人数のクラスが多く、クラス内でのディスカッションがとても活発です。マスクで口の動きが見えないため、議論が盛り上がってくると聞き取りにくかったり、誰が話しているのか分からなかったり。そのため自分が話し始めるタイミングを掴めなかったりと初めはとても苦労しましたが、現在は積極的に議論に参加出来るようになってきました。また教授の方々は学生がマスクなしで学び合えるようにと、天気の良い日は屋外で授業をすることも多々ありました。キャンパスを歩いていると、芝生の上で円を作って座り、学生も教授も前のめりになりながら学び合っている姿を暖かい時期にはよく見かけ、顔を合わせて学び合うことの大切さを改めて感じました。また私はトビ

タテ留学 JAPAN 日本代表プログラムに参加しています。大学での授業に加えトビタテの活動の一環として、小学校でのボランティアや、インターンシップとして世界の問題解決のためのイベントを開催しています。

コロナの影響で留学生が例年に比べ少なく、また現在は私が唯一の日本人留学生でもあります。学内では留学生や様々な文化をテーマにしたイベントが頻繁に行われ、世界中の行き来が難しい今だからこそ国内での文化交流などが重要視されていると感じます。私は日本クラブに所属し、学校全体で JapanDay というイベントを開催するなど、日本人としてのバックグラウンドを最大限に活かし国内での文化交流を楽しみながら促進に努めています。

コロナ禍であっても留学をするという選択ができたことに私は心から感謝しています。大学生という期間は限られており、私にとっては本当に貴重な一年間のアメリカ留学です。言葉では語りきれないほどの素晴らしい経験と自分を成長させる様々な挑戦をすることができ、コロナ禍でも学びや挑戦を諦めないことの大切さを日々感じています。今後の留学生活も更に挑戦を続け頑張ります！

国際教育学科 4 年 今坂優菜



秋のキャンパスの様子



Japan クラブの活動、折り紙



都留文科大学比較文化学会2021年後期講演会

服装観に見るセクシズム

開 催：12月8日（水）

講演者：田中里尚氏

比較文化学会は12月8日（水）に文化学園大学服装学部准教授の田中里尚氏を迎え、「服装観に見るセクシズム」と題した講演会を開催した（講演者と1405教室をオンラインで結ぶハイブリッド開催）。当日は、オンライン参加者を含めて最大75名が参加した。

まず、田中氏から女性の社会進出の過程と服装の関係について説明がなされた。大正時代は女性が社会進出をしはじめた時期であったが、「洋服＝公＝男性」「和服＝私＝女性」という規範が根強く、すすんで洋装を選ぶ女性は少なかった。戦後になると、働く女性は職責を果たすことと、女性らしく振る舞うことが同時に求められるようになり、服装もそうした

状況を反映したスタイルが流行した。

このような前提をふまえ、田中氏は高度経済成長期から現代にいたるまでの就職活動（以下、「就活」と表記）時の服装の変化について、当時のファッション誌などの写真を用いながら説明を行った。

1950～60年代の大卒男性は、学生服での就活が一般的であった。現在主流となっているようなビジネススーツの着用が一般化したのは、70年代半ばからであった。一方、就活の際の女性の服装は男性ほど確立しておらず、現在よりも種類は豊富であった。とはいえ、そこにはビジネスの場に溶け込むというだけでなく「女性らしさ」が求められた。その後、バ

ブル崩壊とともに、しだいにビジネスの場における女性の服装の華やかさが求められる傾向は少なくなっていく。現在のリクルートスーツに関して田中氏は、以前と比べると画一化がみられるものの、シルエットなどで「女性らしさ」を表す工夫がみられることを指摘した。

田中氏は、現在の就活におけるリクルートスーツは化粧やパンプスの着用など、とくに女性への負担が大きいに感じると述べ、それを軽減するスタイルの必要性を説いた。また、リクルートスーツを着ることで個性が失われるという批判が流布する一方で、リクルートスーツは印象形成における能力差をごまかす装置ともなっていることを指摘した。

参加者からは、リクルートスーツが無くなると、TPOに合わせた服装を選ぶ能力も採用者側の判断基準のひとつとなり、就活生が不利益を被る可能性が出てくるなどの意見が出された。オンライン参加者も含め、講演では終始、活発な議論がみられた。

（比較文化学科3年 下田理世）

講師紹介



田中里尚（たなか のりなお）

文化学園大学服装学部ファッション社会学科准教授。立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻修了。博士（比較文明学）。単著『リクルートスーツの社会史』（青土社 2019）。共著に藤田結子ほか編『ファッションで社会学する』（有斐閣 2017）などがある。



都留文科大学国語国文学会秋季講演会

文学研究の愉しみは何か

開催：6月30日(水)

講演者：石川 巧氏

本講演の副題は「文学研究はなぜ楽しいのか」であった。文学研究は何が楽しいのか。これは難問である。また、単純に文学を楽しむことと文学“研究”を楽しむことに違いはあるのか。これも難しい質問だ。石川巧先生のお話から、その答えの一つを知ることができたと思う。

講演ではまず学生時代のお話があった。石川先生は本学国文学科の出身である。石川先生の思い出には私たちに身近な風景が登場するが、当時の学生にしか体験できない経験も多く親しみやすさと同時に興味深さも抱いた。石川先生はこの頃文学に目覚めたが、その研究意義は文字を通して自分の知らない世界を疑似体験し自身が自

由になるためであったという。これは文学研究の愉しみかもしれない。しかし、この体験は単に文章を読む行為によっても得られるのである。決して文学研究のみに言えることではないだろう。

続いて講演は雑誌研究に関する内容に移っていく。石川先生は非常に多岐にわたる雑誌研究をされていてその全てを紹介することは叶わない。その中でも、カストリ雑誌の収集に力を入れているという。カストリ雑誌とは、簡単に言うとエロ・グロ雑誌のことだ。戦中から占領期にかけての雑誌は戦火での紛失やGHQによる言論統制によって残存数は少ない。そうした状況の中、カストリ雑誌の発行は盛んに行われた。カストリ雑誌は当時の人々の欲

望の表出であり、新しい時代の幕開けを予感させる貴重な資料なのだ。こうした過去の人々の息づかいに思いを馳せることが、文学研究の意義であり愉しみでもあると語ってくれた。しかし、ただ過去を思うだけではいけない。自らが過去から未来への接続者としての役割を担わなければならないのである。そうした過去から未来への文学の循環の中に自分が少しでも関与できること、それが雑誌研究ひいては文学研究の愉しみだというのだ。一方でこうした研究は「無人島から手紙を入れたボトルを海に投げる」感覚に似ているという。拾ってもらえるかもしれないし誰にも見つからないかもしれない。こうしたワクワクすらも感じることで、文学と文学研究の愉しみの違いが生まれるのだろう。

本講演を通して、文学研究における愉しみは接続者としての役割にあると知った。今後こうした意識を大切にしながら研究に励みたい。それと同時に文学研究の愉しみは何かという問いに対して、自分なりの解答を見つけないという決意も抱いた講演であった。

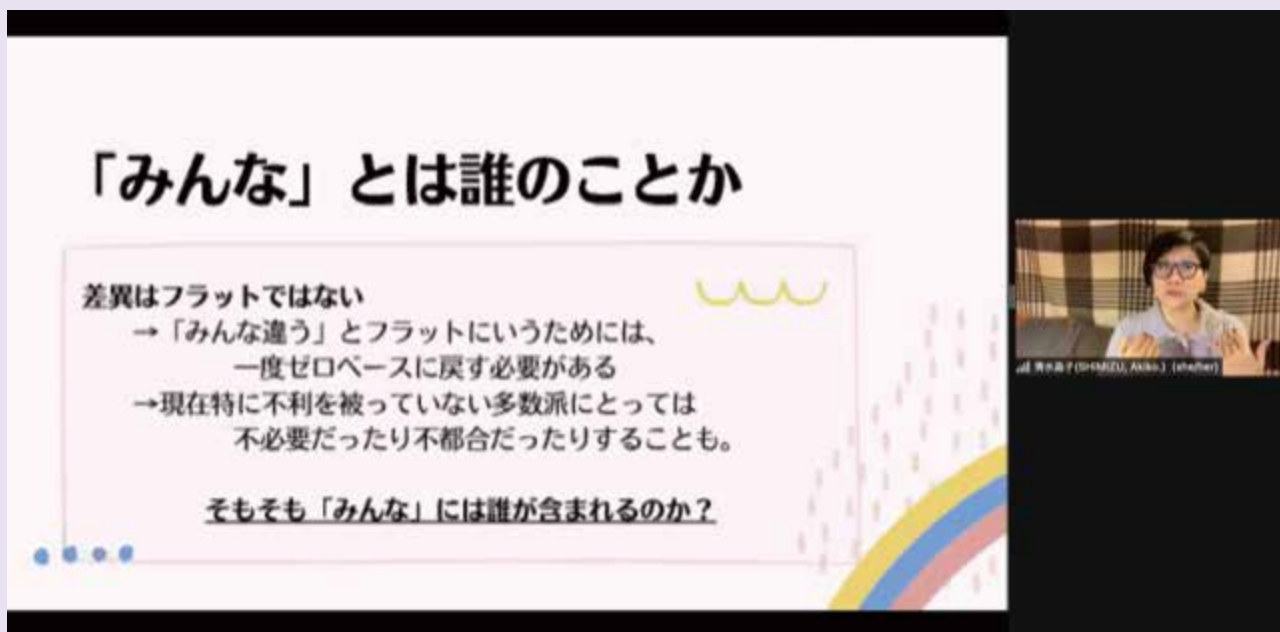
(国文学科3年 松澤海飛)

講師紹介



石川 巧(いしかわ たくみ)

1963年生まれ。立教大学教授。専門は日本近代文学・文化。山口大学専任講師、同助教授、九州大学大学院助教授を経て2006年より現職。主な著書に『幻の戦時下文学』、『幻の雑誌が語る〈戦争〉』、『高度経済成長期の文学』など。2022年に『久保田万太郎の劇文学』、『文学研究の扉をひらく』、『カストリ雑誌総攬』他を刊行予定。



ジェンダー研究プログラム主催講演会

選りとったわけではない共生の不安を生きる

開 催：12月17日（金） 講演者：清水晶子氏

今年度の講演会は清水晶子先生（東京大学大学院教授）が講師として招待された。Zoom によるオンライン開催となったが、100 名近い参加者が集まった。清水先生は 1990 年代以降のフェミニズム及びクィア理論を大きく牽引したアメリカの哲学者ジュディス・バトラーについての研究で著名な方で、講演会はとても楽しみだった。

はじめに清水先生は、「ダイバーシティ」「多文化共生」について話された。これらの言葉は企業が競争で優位に立つための人材の多様性といった文脈で使われることが多く、この場合にはマイノリティの持つ差異が多数派にとって「得になる、役に立つ」ものとして考えられているという。つま

り差異の中でも多数派を脅かさないう、「無害な差異」（チャンドラ・モハンティの用語）のみが受容されている。このようなダイバーシティ観は批評家サラ・アーメッドに「タイフド屋台モデル」と呼ばれ批判されている。

さらに話は 1980 年代米国の AIDS 運動にも及んだ。AIDS 発見当初は「同性愛者」周辺に患者が集中したことから米国政府と社会は強い関心を示さず、介入が遅れた。これに対応すべく広がった AIDS 運動を受け継いだのがクィアムーブメントである。中でも有名な言葉 "We're here. We're queer. Get use to it." が示すように、すでに存在する少数派を排除した社会は実現不可能だ。

人間は傷つきやすい生き物であり、そのために他者に依存しながら生きている。自分を傷つけるかもしれない他者との連帯は不安をもたらすが、それでも共生する理由はそれ以外に生き延びる方法がないからである。「選りとったわけではない共生の不安」を、「解消不可能なまま」、抱えて生きるしかない。その時にはじめて、共存や連帯、多様な社会の可能性が見出しうるのではないかと先生は講演を締めくくられた。学生の質問にも清水先生は時間が許す限り丁寧に回答を下さり、大変充実した時間となった。

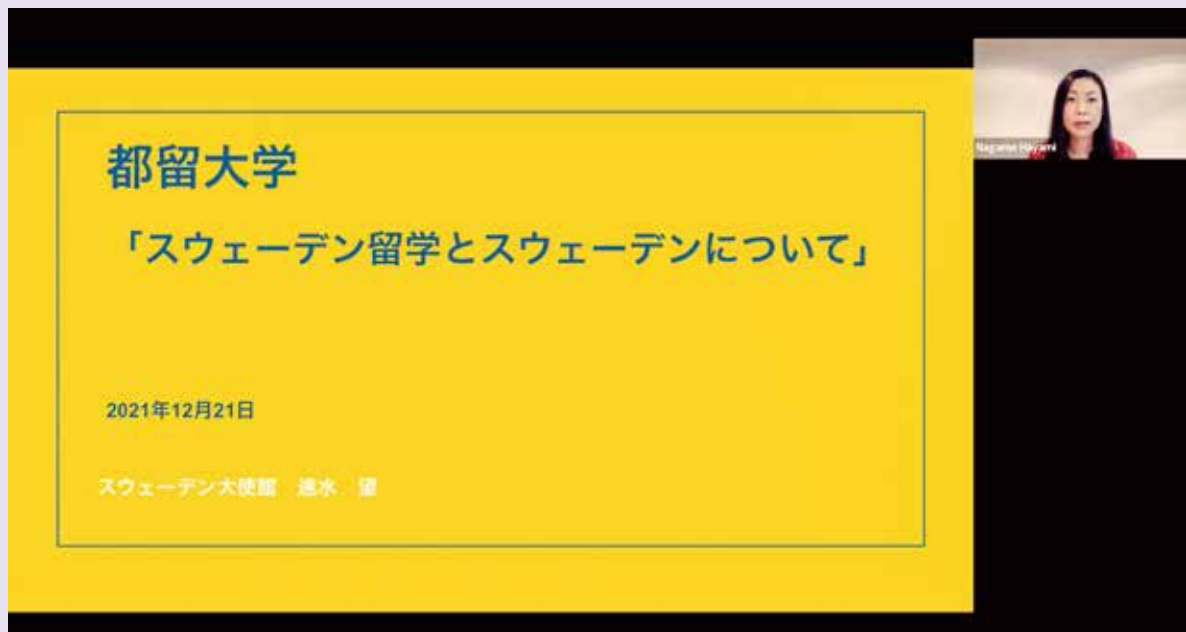
（大学院文学専攻科
英語英米文学専攻 2 年 井上明紀）

講師紹介



清水晶子（しみず あきこ）

東京大学大学院総合文化研究科教授
東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学博士課程修了。
ウェールズ大学カーディフ校批評文化理論センターで博士号を取得。
専門はフェミニズム／クィア理論。
著書に *Lying Bodies: Survival and Subversion in the Field of Vision* (Peter Lang, 2008)、
『読むことのクィア：続・愛の技法』（共著・中央大学出版部、2019 年）など。



国際教育学会主催 北欧セミナー

スウェーデン留学とスウェーデンについて

開催：12月21日（火） 講演者：速水 望氏

本セミナーは学生組織である国際教育学会の主催で、スウェーデン大使館の速水望さんを招き、現地の教育や生活についてご講演いただきました。講演はオンラインで行われ、大学生だけでなく高校生や保護者も参加されました。

最初に留学に関する情報をご紹介いただきました。スウェーデン語ができなくても、英語ができれば現地の生活に支障はないとのこと。現在スウェーデンには39の大学があり、1,000以上のプログラムが英語で行われています。とはいえ、スウェーデン語を学べば生活に広がり生まれるのも確かだとのことでした。

次に、スウェーデンの文化や社会について紹介がなされました。日本の1.2倍の面積をもつス

ウェーデンには約1千万の人々が住んでいます。公用語はスウェーデン語ですが、サーミ語など5つの少数民族語も話されています。技術革新が盛んで、アストラゼネカ、H & M、スポティファイなど世界的企業も輩出しています。Global Innovation Index (2021)ではスウェーデンが世界第2位とのこと。さらに注目すべきは、「持続可能な開発」の理念が社会に浸透している点です。SDGsの達成度ランキングでスウェーデンは世界1位、SDGsの認知度は87%に昇っています。

スウェーデンは充実した社会福祉制度で知られています。速水さんによれば、その基本原則は「一人ひとりが社会に貢献し、誰もが平等に同じセーフティネットと公

共サービスを利用できる」というものです。社会資源への平等なアクセスを支えているのは「すべての人がその能力に関係なく、あらゆる社会的サービスを利用できるようにする」という理念です。勿論、スウェーデンも最初からそのような社会だったわけではなく、戦後、女性の社会進出と移民の受入が進むなか、その時々課題と向き合いつつ、現在の姿に近づいてきたとのことでした。

最後に、参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。今後の日本社会のあり方や人生の豊かさを見つめなおす講演会となりました。

（国際教育学科講師 木下 慎）

講師紹介



速水 望（はやみ ながめ）

ヨテボリ大学文学部北欧言語学科スウェーデン語修士課程修了。東海大学北欧学科非常勤講師、都内語学学校でのスウェーデン語講師を務める。2005年からスウェーデン大使館勤務。著書に『ニューエクスプレスプラス スウェーデン語』『ニューエクスプレス スウェーデン語』（いずれも白水社）など。訳書に『私はカーリ、64歳で生まれた Nowhere's Child』（2021年海象社）。



主催:都留文科大学地域交流研究センター／共催:都留文科大学特別支援学校教職課程委員会
第17回地域交流研究フォーラム

大学 × 地域の可能性 —地域インクルーシブ教育の取り組みから—

2021年度の地域交流研究フォーラムが、2月9日(水)18:30から開催されました。当初対面と遠隔のハイブリッドでの開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、遠隔(ZOOM)のみでの開催に変更になりました。今回は、地域交流研究センター共生教育研究部門の一分野である地域インクルーシブ教育分野の取り組みを手がかりにしながら、「大学×地域の可能性」について意見交換を行いました。

地域インクルーシブ教育分野では、2015年4月の分野立ち上げ以来、主に、特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動「クロボ(クロスボーダー・プロジェクト)」と特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動「キャリアデザインワーク」の2つの活動を実施してきました。

今回のフォーラムでは、冒頭で

分野のこれまでにについて振り返るとともに、2017年4月から5年間、「クロボ」と「キャリアデザインワーク」の運営に携わってこられた学校教育学科の齋藤淑子特任教授と原まゆみ特任教授にそれぞれ話題を提供していただきました。両先生がこの3月に任期満了でご退職されることから、フォーラムの最後には、参加者を代表して特別支援学校教職課程委員会委員長の中川佳子先生(学校教育学科教授)より両先生への感謝の言葉を伝えていただきました。

ZOOM上には約50名が集い、遠くは北海道から参加された方もいらっしゃいました。地域の教育・福祉関係者、本学を志望する高校生、卒業生、「クロボ」「キャリア

デザインワーク」に参加している子どもの保護者の方がたにもご参加いただきました。

参加者からは、「子どもたちやその保護者、地域の方がた、大学生、それぞれの目線で振り返りや今後の課題などが挙げられており、非常にわかりやすかったです。改めて、クロボやフィールドワーク研究は地域との連携協力があってこそだと感じました」「人や地域に対する思いやりの気持ちが大切なのだと、先生方のお話からお聞きすることができた。温かい気持ちになった。とても良いフォーラムでした」などの感想が寄せられました。

(地域交流研究センター
共生教育研究部門担当
学校教育学科准教授 堤英俊)

話題提供者: 齋藤 淑子 (都留文科大学特別支援学校教職課程 特任教授)
原 まゆみ (都留文科大学特別支援学校教職課程 特任教授)
企画・司会: 堤 英俊 (都留文科大学教養学部学校教育学科 准教授)

今年度、創部以来目標にしてきたコンクールの全国大会に出場が叶い、初出場ながらも銀賞を受賞することができました。これも指揮者の北口智宏先生をはじめ、大学及び地域の皆さまのご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。また、現部員が頑張ることができる環境を紡いで下さったOB・OGの皆さまには心より御礼申し上げます。今後も音楽を奏でることができる喜びをかみしめながら、心に響くハーモニーを目指し努力して参ります。

吹奏楽部顧問 平和香子



創部以来初の全国大会出場！

都留文科大学吹奏楽部は昨年、全日本吹奏楽コンクールに初出場を果たし、銀賞をいただくことができました。

今年も全日本吹奏楽コンクールへ出場し、気持ちのこもった演奏を届けられるよう部員一同努力していきます。

吹奏楽部部长 2年 堤 優輝



都留市長表敬訪問

祝 吹奏楽部

第69回 全日本吹奏楽コンクール 初出場&銀賞受賞

特 集

祝 合唱団

第74回 全日本合唱コンクール全国大会金賞&文部科学大臣賞受賞



本番当日 演奏終了後

団員として初めて望んだ全国大会は、清水雅彦先生をはじめOBOGの皆様や応援してくださる全ての皆様によるご支援ご鞭撻の賜物と、心より感謝しております。来年度からの活動も、皆様により一層素敵な演奏をお届けできますよう日々精進していききたいと思います。

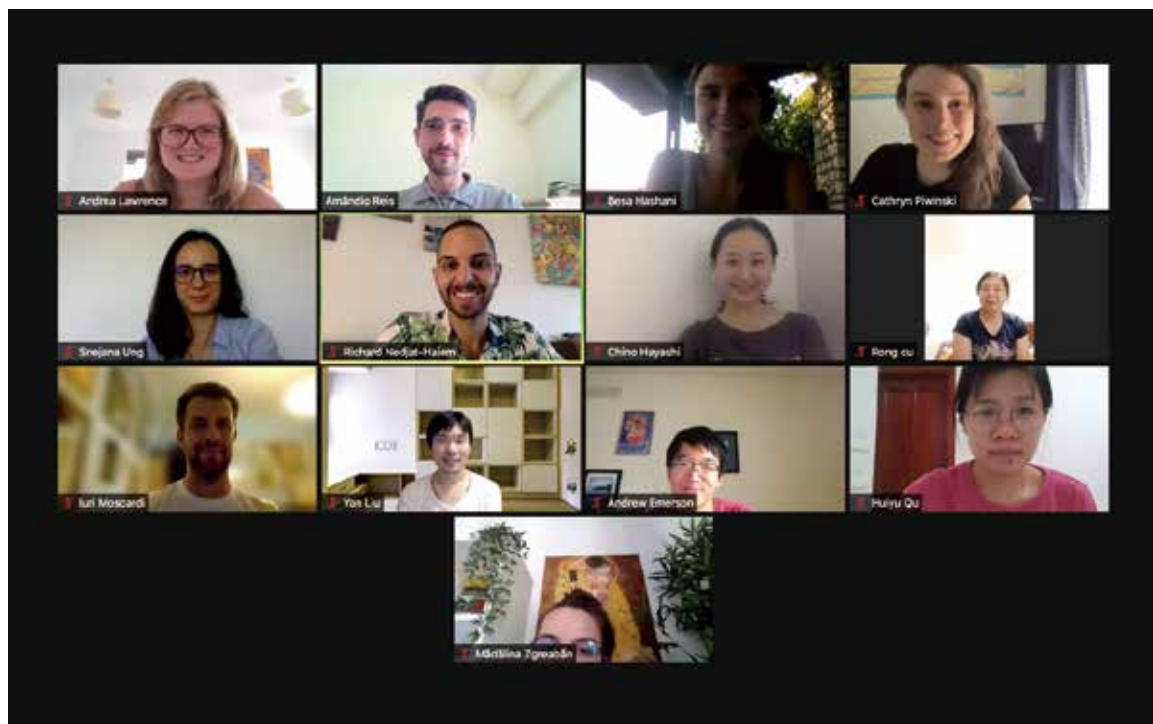
合唱団団長 2年 西澤唯衣

都留文科大学合唱団は、日本で最も権威のある全日本合唱コンクール全国大会に於いて12回連続して金賞受賞、その中でも近々7回のうち5回、文部科学大臣賞（1位）に輝いています。コロナ禍にあって2年ぶりとなった今年度の全国大会では、少数ながら見事に牽引してくれた上級生と、初コンクール出場であり人数上では主力であった1.2年生とが見事に融合し、今や「文大サウンド」と称される高潔な合唱芸術を共に創れたことに感謝しています。

合唱団顧問・指揮者 清水雅彦



都留市長表敬訪問



世界文学セミナー、オンラインセッションに参加して



大学院文学研究科
英語英米文学専攻 1年
早矢仕智乃

ハーバード大学が主催する The Institute for World Literature (IWL) のオンラインセッションに 4 週間参加した。世界中から研究者と学生が集まる講義を通し、充実した時間を過ごすことができた。このような貴重な経験をすることにあたり、お力添えをいただいた先生方と大学に感謝したい。

IWL では二つのセミナーと、コロキウムという研究発表会を経験した。セミナーは、Dieter Lamping 先生の "The Diversity of World Literature" と Delia Ungureanu 先生の "Localizing Time in World Literature and World Cinema" に参加した。それぞれ受講者数は十数名の少人数クラスで講義が行われ、発言の機会が頻繁に設けられる中、活発な議論が行われた。Lamping 先生の授業では、世界文学を理解するために重要な文学理論を中心に勉強した。世界文学のキャンオンをグループワークを通して提示し、意見をぶつけ合うことで、主体的に授業に参加することができた。Ungureanu 先

生の授業では、世界文学と世界映画の関係性を探求し、文献、文学作品、映画を通して勉強した。映画の感想を自由に話す機会も設けられ、良い雰囲気の中で学ぶことができた。

コロキウムでは研究プレゼンを行い、多岐にわたるテーマについての発表を聴いた。発表を通じて受けた指摘を通して、今後の研究課題と方向性を広げるいい機会となった。

オンライン開催になり、不安を抱えながらの参加だったが、期待を超える深い学びを得た約 1 ヶ月となった。世界中から集まった学生や先生方と一緒に勉強した、この貴重で刺激的な経験を、自身の今後の研究に存分に生かしていく所存である。



開催：
 プレ公演 2021年11月20日(土)
 本公演 2021年12月11日(土)
 於：
 コミュニケーションホール 2F
 アートシアター
 演出・英語指導：中原和樹
 主催：都留文科大学文学部英文学科



都留文科大学文学部英文学科有志による英語ミュージカル

Anne of Green Gables ～赤毛のアン

2021年8月からすすめられた本プロジェクトは、コロナ禍の影響を受けながらも、自分たちが成長することができた、唯一無二の舞台となりました。今回の演目は、誰もが知る名作「赤毛のアン」、《Anne of Green Gables》です。この作品のテーマは「成長」であり、主人公アンはもちろん、登場人物それぞれが「成長」していく物語です。作品のテーマのように、自分を含め参加者全員が、約3か月間のプロジェクト期間を通して英語コミュニケーション力、作品や役柄の解釈力、さらには自己肯定力など、様々な側面で成長することが出来たと感じています。

これまで都留文科大学では、演劇を通した英語教育として、英文学科有志によってつくられた演劇



グループ Tsuru Drama Company がシェイクスピア劇の公演を行っていました。2019年4月からは英文学科の新カリキュラムの中で、English Through Drama が開講され、2019年12月から2020年3月には、学科横断プロジェクトの一環として英語や演劇、ミュージカルに興味を持った学生たちが学科を問わず集まり、《The Wiz〜オズの魔法使い〜》の公演



を行いました。2021年3月には、英語の脚本制作から全編撮影による自主映像作品制作、《What I Need Is...》を実施しました。今回のプロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により、8月、9月、10月の間は対面での練習が行えず、オンラインでの練習が続きました。画面越しでの練習は、声や表情が想像以上に「伝わらない」ことが多く、もどかしさを感じずにはいられませんでした。そんな練習があったからこそ、11月のプレ公演と12月の本公演を実現したときは、本当に嬉しかったです。私は、英語でミュージカルを行うことは本作品が初めてだったので、母国語ではない言語で感情を表現すること、曲に乗せて台詞を言うこと、台詞や曲調に込められた意味、それらを表現するためのダンスや行動、など、様々な難しさを痛感しました。それに加

え、初対面の仲間との英語での会話の躊躇いや、作品や役柄が理解しきれないこともあり、自分に自信をなくしてしまうこともありました。しかし、仲間たちと何度も話し合ってみたり、舞台演出家の中原和樹先生からのご指導を頂いたりすることで、新たな一步を踏み出し、成長することが出来ました。そして、コロナ禍の今だからこそ、皆で一つの舞台を作り上げた達成感と充実感は、かけがえない財産です。自分たちの思いが込められたこの作品をもっと多くの方に知って頂けたら幸いです。

今回、対面での練習が出来なかった期間を経て、改めて、人と直接話し合い、触れ合うことの大切さを感じました。この状況下でも無事に公演を行えたこと、見に来て下さった観客の皆様、そして、顧問である加藤めぐみ先生、演出家の中原和樹先生など、この作品に携わって下さった全ての方々に、深くお礼申し上げます。この経験と感謝を忘れず、これから Tsuru Drama Company をさらに発展させていきたいと思っています。

(英文学科2年 小林由奈)



演出・英語指導：中原和樹（なかはら・かずき）

劇団もんもちプロジェクト主催・演出。日本演出者協会会員。山梨県民文化ホールアーティスティックアドバイザー。演出家、劇作家、舞台監督、アクティングコーチとして様々な顔を持ち、いろいろな角度から演劇と向き合い、芸術のジャンルを超えた舞台作品制作を目指している。

音楽研究室主催の卒業演奏会

開催日：令和4年1月29日



音楽系4年と審査してくださった先生方

本年度の音楽研究室主催の卒業演奏会につきましては、新型コロナウイルス感染拡大の中ではありますが、音楽系の先生方をはじめ大学関係者の皆様、また音楽系の下級生のお力添えをいただき、無事開催することができました。関わってくれた全ての皆様に改めて感謝申し上げます。この卒業演奏

会は、音楽系での4年間の学びの集大成としてのステージであり、これまで3年間、先輩方の素晴らしい演奏を聴かせていただき、私たちもその舞台上で演奏することを目標にしてこれまで練習に励んで参りました。卒業演奏会に至るまで、私自身の技術不足に悩んだり、思うような表現ができなかったり

することも何度かありました。その際は、先生方に丁寧にご指導をしていただいたり、仲間からはアドバイスをもらったりしながら、最後まで自らの演奏を高めようと取り組んで参りました。本番ではその成果を十分に発揮できるように精一杯臨み、非常に貴重な経験になりました。

これまでの音楽系での学びを通して、演奏の技術を学ぶだけではなく、音楽の楽しさや素晴らしさを知ることができました。一方、練習を通じて私自身の課題を見つけ、それを解決する機会も与えてもらいました。今後私たちは、今日までのように音楽を演奏する立場から、音楽を活かし、その良さを伝えていく立場になります。この4年間本学で学んだことを成長の糧にし、社会人としても日々精進していきたいと思っています。

学校教育学科 音楽系
花輪大和

令和3年度図工・美術系 卒業制作展

開催期間：令和4年2月2日～4日

開催場所：美術研究棟

卒業制作展を振り返って

私たち図工・美術系の4年生は1年間という長い期間、作品制作を行ってきました。それぞれの想いがある中で、自分らしい作品を制作することができたのではないかと思います。

私自身、4年生になってからは夏に行われる教員採用試験及び秋に行われる大学院入試の対策をしながら卒業論文と卒業制作に取り組む日々を送っていました。勉強、面接の練習などにも追われていましたが、その合間に絵を描く時間が私にとっては大切な時間でした。そして、卒業制作にあたって

は大きな画面に挑戦したいというF100号(1620mm×1303mm)というサイズを選び描き始めました。大きな画面に時間をかけて取り組むことで、自分自身とも向き合いながら表現活動ができたと思います。

今年度の卒業制作展(会期：令和4年2月2日～2月4日)は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、外来者を受け入れない内覧会という形式で開催することになりました。学内外問わず多くの方にこれまで向き合ってきた作品を見ていただけなかったことは非常に残念です。しかしながら、これまで製作過程をなかなか見るこ

とができなかった仲間たちの作品を見て、ともに考えながら学び合ってきたことを実感しました。図工・美術教室での学びはかけがえのないものとなりました。

最後に卒業制作展の開催にあたり、協力してくださった先生方をはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。来年度は無事開催できることを心から願っています。

学校教育学科 図工・美術系
奥山悠衣香



少林寺拳法拳士会

少林寺拳法は、日本の香川県発祥の武道で、人づくりのために作られました。そのため、日々の修練では、心と体を共に鍛える「拳禅一如」（けんぜんいちにょ）という教えをもとに、仲間とともに技術の向上を目指しています。少林寺拳法の種目は、二人一組が組手となって型を行う組演武と、相手を想定して一人で型を行う、単独演武と、三人で演武を行う三人掛け。また、六人以上で動きをそろえて行う団体演武があります。そのほかにも、少林寺拳法の技術が実際の場面で運用できるかを図る、運用法など、多くの種目があり、それぞれの種目で幅広い年齢の人が修練に励んでいます。

私は、2021年11月7日に、武道館で行われた全日本学生大会に初めて出場し、女子有段単独演武の部で優勝することができました。コロナ禍で活動を制限されている中、多くの人の協力で大会

が行われたことに感謝しています。また、練習が原則禁止されているなか、練習場所を用意してくださった先輩方や、監督のおかげで、練習の成果を発揮し、自分らしい伸びのある演武ができたと思っています。

これからの練習でも、日々感謝の気持ちを忘れずに精進していきたいです。

（少林寺拳法拳士会1年 大槻夏鈴）



中学生からの同志との一枚

学生の活動

水泳部

私たちは現在選手8人マネージャー1人と少ない人数ではありますが、部員間の仲も良く明るい雰囲気です。また、中には水泳経験の豊富な先輩もいることから練習では良い刺激をいただいています。さらに、昨年12月18日に行われた関東学生ウィンターカップ公認記録会ではその甲斐あってか50m平泳ぎにおいて優勝することができました。私は高校時代も水泳部に所属していましたが、高校三年の最後の大会では感染拡大により出場することができず、昨年も4月に入学して以降、半年以上大会に出場することができませんでした。しかし自分を含め多くの選手が目標タイムを作り懸命に練習してきたことから、今大会は満足のいく記録を出すことができ今後に繋がるものとなりました。水泳部は一昨年にできたばかりで学内でも知っている人は多くない

かと思いますが、今後さまざまな大会に出場し記録を更新したいと思いますので応援よろしくお願いします。

（水泳部1年 桑原 駿）



試合の様子

地域交流研究センター自然共生研究部門主催

「ムササビ観察ツアー」を開催

地域交流研究センターでは、例年大好評の都留市鹿留地内の今宮神社において地域交流研究センター長 北垣憲仁教授の「ムササビ観察ツアー」を12月1日（水曜日）と12月4日（土曜日）の2日間開催しました。今回は、コロナウイルス感染拡

大防止のため、定員を10名に限定して行い、2日間で13名の参加がありました。両日とも寒さの厳し日でしたが、ムササビを観察することができました。特に、4日の土曜日は、ムササビが滑空するところを良く観察することができ、参加者の

皆さんも喜んでいました。また、この観察会は環境ESDプログラムの実習に組み込まれており、学生たちが1ヶ月以上かけて観察の段取りや観察のポイントの説明などを準備してきました。当日は学生たちにとっても思い出深い実習となりました。



『今宮神社境内での生息場所説明』



ムササビ観察後のミニ講座

地域交流研究センター共生教育研究部門主催

「つるぶんカフェ」を開催

地域交流研究センターでは、「つるぶんカフェ」を1月29日（土曜日）に開催しました。当初は、地域のカフェで対面式での開催を予定していましたが、コロナウイルス感染拡大防止のため、募集定員を5名と限定してZoom開催に変更して行いました。

当日は、参加者4名（1名欠席）、運営スタッフの学生3名、講師1名での開催になりました。学校教育学科の堀川修平先生に『「性の多様性ってなに？」～子どもとわたしと教育と～』というテーマに沿ってお話をいただきました。それぞれの思っていることを話し、多様性に

いてみんなで考える良い機会になりました。

「互いが尊重される空間が非常に心地よかった」、「和やかな雰囲気だった」、「次回はぜひ対面で」など、参加者の皆さんからお声をいただきました。



『右から2番目が講師堀川氏』



『つるぶんカフェチラシ』

NHK 大学セミナー × 都留文科大学

『パックンマックンの笑劇的国際コミュニケーション力』



会場の様子



パックンマックン

11月17日（水）、NHK 甲府放送局と共同し、「NHK 大学セミナー」を開催しました。本学での開催は前回の2015年に続き2回目。今回はお笑いコンビ「パックンマックン」を講師にお迎えし、約120名の学生に講演を行いました。

講演では、堅苦しく考えず、今まで学んだことに自信を持ち、もっと気楽にコミュニケーションをとることが大切、など、お二人の実体験を交えたお話から、国際的なコミュニケーション力について学びました。テンポの良い掛け合いやコントに会場が笑いに包まれ、大盛況のセミナーとなりました。

都留文科大学附属小学校の児童が都留文科大学を体感！

12月20日（月）、都留文科大学附属小学校の児童37名が都留文科大学を訪れ、大学の説明や特別講義、キャンパスツアーを通し、大学の雰囲気を感じました。語学教育センターの Delgrego Nicholas Dirk 講師による特別講義では、低学年は英語のミニ本作成、高学年は名詞・動詞の違いを学んだり、赤

レンガ広場で英語版おどろおどろの「Freeze Game」をしたりして、ネイティブ教員による生きた英語を学びました。

キャンパスツアーで訪れた地域交流研究センターでは、動物の骨や貴重なパンダのフンなどを見学しました。参加した児童の皆さんからは、「ニック先生がえい語をいっぱい教えてくれ

たから、えい語が楽しくなってきました」、「自分も都留文科大学に行き、自分の夢がかなうといいと思います。」、「高校で勉強していればいいと思っていたけどもっと勉強をして大学行きたいと思いました。」などの感想をいただきました。



「Freeze Game」を楽しむ4～6年生



1～3年生の体験授業

編集後記

学校教育学科 加藤 優

紙媒体の活字離れが叫ばれて久しい。電車内の朝刊片手読みは2割ほどで、若い人にいたっては数%しか新聞を読んでいないという。ただ本や新聞という紙媒体を利用してないだけで、アプリから情報を受け取れるのも事実である。スマホの普及とともに活字データはパソコンなどのデバイスがあれば、その多くを活用できるようになった◆私が学生の頃、論文は原稿用紙に手書きだったし、必要とする情報は紙媒体のものがすべてだった。当然、文献探しも神田の古本屋街や国会図書館まで足を運んだりしていた。書棚には同じ系列の本が並んでいたの、手に取ってあれやこれやとみているうちに、お目当ての本以外も買っていたのを思い出す。最近では本や論文は自宅で検索でき、さまざまなデバイスのディスプレイで情報を受け取ることができる時代。便利で効率的といえは確かにそうだが◆この時期、卒業論文に取り組む学生は文献や先行研究など、必要な情報をスマホやパソコンの画面から受け取ることが多い。そんな学生の卒業論文はファイルで送られてくるが、年のせいかもしれ

ても紙媒体に印刷してしまう。パソコンの画面からは頭に入らないし深く理解できないのである◆紙媒体の文章を読む際、「思いをめぐらす」とか「理解しよう」としたとき、ページをめくり返したりメモを書き込んだりする。考え方の文脈や経緯、もっと言えばそのまわりのニュアンスとか、時空間を超えた記憶みたいなものが案外役に立つ気がしている。パソコンの画面ではそれがなかなかできないのである。電子書籍も同じ。デジタル化は情報そのものがすぐに手に入り便利で効率的だが、肝心の記憶の定着や理解が浅くなる気がする。新聞をめくる、辞書を引く、ページをめくる、確かに非効率的かもしれないが「深く考える」ために必要なのではないか◆そして今、学生の4年間の成果が卒業論文として完成した。卒業おめでとう。



コロナ禍、奮闘中（撮影のときだけ集合しました）



令和3年度の卒業論文

ぶんだい堂

公民科授業実践の記録



西尾 理 著
2022年1月14日発行
学文社

都留文科大学の公式SNSでは、
大学・学生の様子や、キャンパスの風景などを
紹介しています！



Instagram

https://www.instagram.com/tsuru_university/



Twitter

<https://twitter.com/universityTsuru>



YouTube

<https://www.youtube.com/channel/UCPqvXhnqtn-0Suu8iMRtuOw>



〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第148号 2022年3月9日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大（委員長）・日向良和（副委員長）・杉本光司（担当副学長）・野口哲也・加藤めぐみ・山本芳美・山越英嗣・ルドルフ・ストロム・ヨハン・加藤 優・横瀬晴紀（経営企画課長補佐）・安富博史（企画広報担当）・天野麻由（企画広報担当）